

---

# 東方黒狼記

猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方黒狼記

### 【Nコード】

N0947Y

### 【作者名】

猫

### 【あらすじ】

気がつけば神様が目の前にいて、転生することになった。ちょっと楽観的な元高校生のお話。処女作です。原作とは違う点がありました。りするかもしれません。あと更新は不定期です。

くプロローグく 神々の住まう世界にて（前書き）

初めて書いた小説です。

いろいろおかしい点があったりするかもしれませんが、読んで頂ければ幸いです。

指摘してくれると嬉しいなあ…なんて

くプロローグく 神々の住まう世界にて

「……………なんだ、ここ？」

その問いかけに答えてくれる相手がいるわけでもないのに、思わず口から出てしまった。

仕方ないと思う。

今、居る場所を一言で表すなら、草原。

雲一つ無い晴天で、地平線がはつきり見える。

だが、本来なら空にあるはずの太陽が無い。

それなのに視界は明るく、特に寒さを感じるわけでもない。

奇妙な状況だった。

「ここは、神々の住まう世界ですよ」

そんな声が聞こえた。

女性の声だろう、少し高い声だった。

声のしたほうへ振り返ると、予想通り白いローブの様な服を着た女性が立っていた。

「……………神々の住まう……………世界……………？」

「ええ、その通りです」

何言っただこの人は。

普段ならそんな言葉が頭に浮かんだと思う。

だけど、太陽が無い、という現実味の無い状況と、

目の前に居る女性が放つ雰囲気というか、気配の様なものが、神々しいというか、普通とは違うように感じられて。

「じゃあ、俺は何でここに居るんだ？」

その人の正気を疑うでもなく、そんなことを聞いていた。

「……………それは、私のせいです」

「……………？」

「すみません、順を追って説明しましょう。先ほど、ここは神々の住まう世界、

と言いましたよね？」

「ああ、つてことはあんたは…」

「ええ、私は女神です」

その後、その女神から聞いた話を簡単にまとめると、神はその女神以外にも存在するらしく、一柱ごとに一つの世界を持つているらしい。

そして、その女神が管理する世界に生まれるはずだった存在が何故か別の世界で生まれてしまった。

それが俺。

そして、その俺を元の世界へ連れ戻すために俺をここへ連れて来たらしい。

直接元の世界へ送ればいいのでは？と思ったが、世界同士を繋ぐ手段は存在しないとか。

だから一度この神々の世界へ連れてきて元の世界へ送る、という事だそうだ。

「…ひょっとして俺はすごい体験をしてるんだろっか？」

「そうですね、神ではない存在がこの世界へ来ることは、本来ならありえない事です。」

さらっと肯定された。

すげえ…なんか気付いたら神様の世界に居たよ俺…

「でも、元の世界に戻るって事は、俺が今まで居た世界にはもう戻れないって事？」

「…その通りです。」

少し悲しげな表情で女神は答えた。

「すみません、もっと早くあなたを連れ戻せば良かったのですが

…」

今、俺は高校二年生の十七歳。

家族や友達の思い出も人並みにあるし、当然、今までの暮らしも気に入っていた。

「…もし俺が元の世界に戻ることを拒否したら？」

「…無理やりにも連れ戻すことになりません」

「なんでだ？俺はあの世界に居ちゃいけないのか？」

「あなたは私が創り出した存在です。」

別の神が創った世界に居ると、それだけで悪影響を及ぼしてしま

うんです。

それも、時間が経てば経つほどその影響は大きくなっていく……」

「…つまり俺が今まで居た世界にとって、俺という存在そのものが害悪だった…？」

「……はい」

「…悪影響って、例えばどんな？」

「…先日、あなたの住む地域に大型の台風が直撃しましたよね？」

「それ、俺が原因なのか…」

そんなことを言われたらもはや自分の我儘だけで戻りたくない、とは言えないよな…

それに、俺が原因で家族や友人に危害が及ぶのはごめんだ。

「…わかった、元の世界に戻ろう」

「……ごめんなさい、私のせいで…」

耳を澄まさなければ聞こえないぐらいの小声でそう呟いた。

きつと周りで何か音が鳴っていたら聞き取れなかっただろう。

「別にあんたのせいじゃないだろう。何で俺が別の世界に飛ばされたかも分かってないんだから」

女神は驚いた表情をした。

その後少し微笑んだ表情で

「ありがとう、優しいのね」

と言った。

「楽観的、と言われたら否定出来ない気もするけどな…」

苦笑いしながら言ったら、女神もクスクスと笑っていた。

頭が混乱してて考える余裕も無かったけれど、よく見るとすごい美人だ。

不覚にもその笑顔にすこしドキッとしてしまった。

その後女神は真剣な表情になり、

「実は、あなたを元の世界へ連れ戻す、と言ったけれど、そのまま連れ戻すことはできないの。」

「どういう事だ？」

「あなたは長くあの世界に居すぎた、あの世界の影響を受けすぎたのよ。世界とその世界にいる存在は、互いに影響しあうの。今のままあなたを元の世界に戻せば、その世界にも悪影響を及ぼしてしまう」

「…じゃあ、どうすれば？」

「一度魂を浄化しなければならぬから、転生という形で私の創った世界へ行ってもらおう」

「転生…」



「ええ、記憶は消えないけど、肉体を他の生態のものに変えなければならぬの。」

「つまり、人間ではなく、妖怪として世界に生まれることになるわ」

「妖怪！？あなたの世界には妖怪がいるのか！？」

「ええ、犬や猫でも転生は出来るのだけれど、人間に近い生態の方がいいでしょう？」

「そりゃあ、確かに…」

「というか、なんかさっきと態度変わってないか…？」

「私のせいじゃない、って言うてくれたおかげで少し気楽になってね」

「さらっと心読まないでくれよ…」

「お詫びとして、私の加護を最大限付与するわ」

「加護？…ってどんな？」

「転生した後に説明するわ、あなたもこの何も無い空間より新しい世界が見てみたいでしょう？」

「まあ…妖怪がいるなんてどんな世界なのか気になってるのは確かだ。」

「それもそうだな」

「それじゃあ、これから転生させるわ」

そういった後、女神は何か小声で呪文のような言葉を呟いた。  
そして

「あなたに加護を……」

その言葉を最後に、俺は意識を失った。

くプロローグく 神々の住まう世界にて（後書き）

楽観的でちょっとどこかおかしい主人公でした。  
名前は次回で

く第一話く 新たな世界とナビ兼師匠（前書き）

長ったらしい説明の回

早く原作キャラを出したい…

く第一話く 新たな世界とナビ兼師匠

風が頬を撫でる感触で目が覚めた。  
どうやら仰向けで倒れているらしい。  
ゆっくりと起き上がり、辺りを見回す。

「…樹海…だな…」

とりあえず体に違和感が無いか探ってみると、  
三箇所ほど違和感を感じた。  
腰と頭、側頭部の三箇所だ。  
腰の違和感を手で探ってみると、なにかもふもふとした手触りを感じ  
る。

目の前に持ってきてみると、黒い毛に覆われた何かがあった。  
手で触れると少しくすぐったさを感じる。

「尻尾…だよな…」

それは紛れもなく自分の腰から生えた尻尾だった。  
つやつやとした毛に覆われていて、我ながら中々良い手触りだ。  
次に側頭部に触れてみると、あつたはずの耳がなく、  
頭に触れるとそこにももふもふとした感触がある。  
先程から自分の声はこの頭の部分から聞こえている。  
見えないが、おそらく犬のような耳が生えているのだろう。

「ああ、妖怪として生まれるって言ってたっけ」

「そうヨ。もうアナタは人間じゃないノ」

不意に後ろから声を掛けられた。振り返ると、身長40cmくらいの羽の生えた女の子が飛んでいた。

「君は？」

「アタシは妖精。女神様からアナタをナビしながら鍛えてほしい、って頼まれたノ。」

「って言うても、アナタを一人にしても大丈夫だとアタシが判断するまでの間だけだけどネ」

「なるほど、よろしく頼むよ」

「えエ、こちらこそ。ああそうそう、女神様がアナタの新しい名前を考えてくれたけど、聞ク？」

「もちろん、自分で名乗りたい名前があるなら、それでも構わないけど」

「名前？名前か…、考えてなかったな。その女神様が考えた名前って？」

「人の心を持つ妖怪、人と妖怪の狭間のような存在だから、

狭間 妖人（はざま ようと）、と言っていたワ」

「狭間 妖人…、良いな、気に入った。」

「なら名前は決まりネ。次にこの世界の事だけど、今までアナタのいた世界とあまり変わらないワ」

「え…？じゃあ、妖怪はどうやって暮らしてるんだ？今までいた世界で妖怪なんて見たことも無いぞ？」

「大丈夫ヨ、今はまだ恐竜達が生きているほど古い時代だから」

「き…恐竜!？」

「そう、この世界ではまだ人間は生まれていないノ。ア、でも安心して。寿命で人に会うことすらなく死ぬなんてことはないワ。妖怪は基本的には不老不死だから」

いや、確かにそれも不安だったけど、なんで転生する前に教えてくれなかったんだよ…

しかも妖怪は不老不死?いくらなんでも説明不足すぎやしないか女神様…

「…でも、転生する以外方法は無かったし、これはこれで面白そうだしいつか」

「…随分立ち直りが速いのネ…。普通もつと騒ぐと思っただ」

「うじうじ悩むのは性に合わないからな」

「…まあいいワ、それで以前の世界と違う点だけド、妖怪が存在すル。これはいいわネ?」

「ああ。俺以外にもいるんだよな?」

「もちろんヨ。あと、以前の世界にはなかった力があるワ。この力は大きく分けて5ツ。

神力、霊力、妖力、魔力、そして能力の5つネ」

妖精の説明によると、  
神力は名前の通り神様が持つ力。人間から信仰を集めれば集めるほど増えるらしい。  
信仰を集めれば人間や妖怪も神として扱われるらしい。半人半神、半妖半神という存在になるんだとか。  
この現象は神格化、と呼ばれているそうなの。  
ていうか、神様まで居るのかこの世界…

霊力は人が持っている力。ただし誰でも持っているわけではないらしい。

この力でいわゆる陰陽術とかが使えるらしい。

妖力も名前の通り妖怪が持つ力。これで幻術とか妖術とかが使えるらしい。

長く生きている妖怪ほど多いとか。

ってことは俺も将来かなり多くなるんだろうか？

魔力は人や妖怪は関係なく、持っている奴は持っている、ということらしい。

いわゆる魔法や魔術を使う時に使う力だ。

そして最後に能力なんだが、これは先述の4つとは少し違う力らしい。

魔力と同じで持っている奴は持っている、だが能力は最初は眠っているらしく、

目覚めるきっかけは個人によって違うらしい。

能力が目覚めたら、具体的な能力の名前が頭に浮かぶんだとか。

「アナタは女神様の加護を受けているおかげで、神力以外の力を持っているワ」



「へえ、つて事は能力もあるのか？」

「えエ、しかもアナタは能力を3つ持っているワ。アナタが能力が目覚めるよう念じれば、それだけで目覚めるはずヨ」

なるほど。じゃあ早速…、  
目覚める！俺の能力！  
お、本当になんか頭に言葉が…

「……………」

「…どう？」

「習得する程度の能力、  
生み出す程度の能力、  
消し去る程度の能力、  
……つて頭に浮かんだ」

「その三つがアナタの能力ネ」

「具体的にどんなことが出来るのかさっぱりなんだが」

「基本的に能力は念じれば使うことが出来るワ。普通は能力を使うときに霊力や妖力を消費するけど、女神様の加護のおかげでアナタは消費しないはずヨ」

「へえ…女神の加護つてすげえな」

試しにりんごを生み出してみる。

手の上に真つ赤なりんごが出てきた。かぶりついてみると、甘酸っぱくて美味しい。

今度はりんごを消してみる。

音もなく食べかけのりんごが消えた。便利だなこれ…

「習得する程度の能力って何なんだ？」

「さア？試してみないと分からないわネ。話を戻すワ。この世界についての説明は大体終わりネ」

「今まで居た世界との違いってこれだけなのか？」

「えエ、後は歴史がまったく同じではないってことくらいかしら。まア、これは世界が違うから当たり前ネ」

「なるほどね…そっいや、ナビと”鍛える”って言うてたっけ？」

「そうヨ、アナタがこの世界で生きていけるようにネ」

「そんなに危険なのか？この世界って」

「妖怪っていうのは基本的に欲に忠実ヨ。奪いたい、殺したい、なんていう欲にも忠実だから危険なノ。中には理性的な妖怪も居るけれど、

あまり多くはないわネ」

「へえ、理性的って俺みたいなの？」

「少し違うワ、アナタは人の心を持っているからヨ。それに妖怪ハ、

食料の他に人間の恐怖の感情を糧に生きているノ。アナタは必要ないけどネ

そもそも妖怪ハ、人間の恐怖が具現化したものだから、恐れられなくなつた妖怪は消滅するノ」

「なるほど、つて事は、人間がまだ生まれてないつて言つてたよな？  
じゃあ、妖怪もまだ居ないのか？」

「えエ、まだ両方いないワ。だからアナタは始祖の妖怪、つてことになるわネ」

……俺どんだけー

「じゃあ、今すぐ鍛える必要はないのか？妖怪はまだ居ないんだろ  
う？」

「いいエ、そういうわけにもいかない……」

妖精の言葉を遮つて、とんでもなくでかい音が聴こえた。  
いや、音じゃないな。これは……

「鳴き声……？」

ふと、空を見上げてみると、木々の間から大きな何かが通り過ぎて  
行った。

はつきりとは見えなかったが、おそらく恐竜だ。

「…そっか、そついやそつだつた……」

「えエ、だから今すぐにも鍛え始めないと生き延びれないわヨ」

「なるほど…じゃあ早速ご教授お願いします！師匠！」

「師匠…いい心掛けネ！みっちり鍛えてあげるワ！」

冗談で師匠と言ってみただが、案外気に入ってくれたようだ。こうして俺の修行が始まった。

く第一話く 新たな世界とナビ兼師匠（後書き）

おめでとう！

主人公は厨二全開な名前と

女神の加護という名のチートを手に入れた！

2011/11/08 修正しました

〜第二話〜 殺すという事(前書き)

狭間は元の世界では高校生だったので、当然生き物を殺した経験はありません。あっても蚊を殺したくらいです

## 〜第二話〜 殺すという事

妖精との修行は厳しかった。

まず、妖力を扱う事から始まり、その後霊力、魔力の扱い方を教わった。

やはり妖怪だからなのか、妖力が一番強かった。

いきなり実戦、妖精と戦うことになった。

なんでだよ！？という俺の講義は聞き入れられることはなく、ボコボコにされた。一応、見よう見まねで妖力の弾を撃つたり、結界っぽいものも作れたりしたが、妖精にはかすりもせず、一方的に攻撃を食らって負けた。

その後休憩時間をもらったので、能力を色々試してみた。

まず、自分の容姿を確かめたかったので、鏡を生み出してみた。

自分の容姿は、黒い髪、黒い瞳までは日本人だったし良しとして、尻尾や耳、服までも黒と黒尽くめだった。

鏡の後は、生物を作り出せるか試してみたが、無理だった。

妖精と戦っている最中にも少し試してみたのだが、

”妖精より強い自分”を生み出すことは出来なかった。

妖精が撃ってきた弾を消し去ることは出来た。

どうやら、生物に直接干渉することは出来ないらしい。

だが、使いようによっては中々便利で、例えば人形を作るとして、生み出す前に動作を予め頭の中で設定するよう念じて生み出せば、その通りに動く人形が出来上がる。

これで人形に肩を揉ませたり、荷物を運ばせたり出来る。戦闘でも役立つかもしれない。

楽器と一緒に大量に生み出せば一人オーケストラとか出来るかな？

次に習得する程度の能力だが、さっきの妖精との戦いで、

見よう見まねの妖力弾と結界を作っていたが、

どうやらこの能力のおかげらしい。

普通はいきなり妖力弾や結界を作るなんて不可能ヨ、と妖精に言われた。

習得というか、コピー能力に近いものと思えばいいかもしれない。こんな風に、妖力や霊力、魔力の扱い方を学びながら、妖精の修行という名のイジメを受けて十年ほど経ったある日、

「……………なんか腰が痛い……………」

「老化かしら？」

「失礼な」

痛みはだんだん激痛に変わり、ずるっという謎の音と共に収まった。

「なんだったんだ…………？」

「あう、自分の腰を見て御覧なさいナ」

「ん…………？」

自分の腰を見てみると、なんと尻尾がもう一本生えていた。

「……………増えた！？」

「妖怪にとって尻尾の本数は強さの証でもあるのヨ。九尾の狐とか聞いたことない？」

「なるほど、そういう事が……………、ちょっとびっくりした」

「それにしてもたった十年で一本増えるとハ……………末恐ろしいわネ」



どうやら俺は習得する程度の能力のおかげなのか、  
飲み込みが尋常じゃないほどよく、成長のスピードがとんでもない  
速らしい。

妖精と実戦で鍛えているため、純粹に身体能力も上がったし、  
反射神経なんかも良くなった。最近では殺気も放てるようになったし、  
感じることも出来るようになった。

「……そろそろかしらネ」

「なにがだ？」

「アタシ以外の相手との実戦ヨ」

「妖精以外って…誰と戦うんだ？」

「もちろん、この樹海の外に居る恐竜ヨ。」

「…早くないか？」

「純粹に戦闘能力だけで言えばそこらの恐竜相手なら楽に勝てるは  
ずヨ。」

ただ問題八、相手を殺す覚悟があるかどうか…ネ」

「相手を…殺す…」

そうか…今まで何も考えず全力で戦っていたけど、妖精が相手だか  
ら出来た事だ。

恐竜を相手にするとなると向こうは全力で俺を殺しにくるだろう。  
だが、俺にその相手と同じ様に躊躇なく命を奪うことが出来るだろ

うか？

この世界に来て十年の月日が経ったとはいえ、生き物を殺した経験が無い。

食料も能力で生み出していた。

やはり改めて殺す、となると…

「…やっぱり少し抵抗があるな」

「それでも殺さなければならぬワ。でなければアナタが死ぬだけ」  
「」

「…だよな。わかった、樹海の外に出よう」

「本当に危なくなったら助けてあげるけど、基本的にアタシは何もしないワ。」

自分自身の手で殺しなさい。そして命を背負う事を覚えなさい」

「……ああ、出来るかわからないけど、やってみる」

俺は妖精の後に付いて行き、樹海の外に出た。

目の前に恐竜が三匹居る。

「それじゃア、後は自分で殺りなさい」

「……ああ」

恐竜もこちらに気付いたらしく、三匹とも俺に飛び掛ってきた。

焦らずに回避、と思ったのだがうまく体が動いてくれない。

転がるように攻撃を避けた。妖精との戦いとは全然違う。

恐竜とはいえ、修行は本気で受けたし勝てるだろうと侮っていた。

三匹とも殺気を放ちながら向かってくる。その姿に気圧されて、足が固まってしまっていてうまく動けない。ようやく実感していた。これが殺し合いなのか…と

「だけど…俺も殺されるつもりは無い！」

俺も殺気を放ちながら恐竜の牙や爪を避け、拳や蹴りで相手を吹き飛ばす。

途中、肩に噛み付かれたが、腹を蹴り、顎が緩んだところで首をつかみ、

背負い投げのように前に放り投げた。

焦っていたのか、妖力も能力も使っていなかったことに気づき、妖力弾を放ちながら能力で刀を作り出し、

恐竜の首を切り落とした。この感触は慣れそうに無い。ぐじゅり、という肉を切る音と感触。

断面から見えた肉、その直後噴出す血液。

斬っている途中なにか引つかかるような感触があった。

おそらく骨、だと思う。断面に白い部分があったから。

胃から何かこみ上げて来るがなんとか押さえ込み、

残りの二匹を殺した。

敵が居なくなつた安心感のせいか、押さえ込んでいたものがあふれ出し、

俺は盛大に吐いてしまった。

「…………お疲れさま」

「妖精…」

「…今の気持ちを忘れないことネ。人の心であり続けたいのなら」

「…ああ」

素っ気無い返事しか出来なかった。

楽観的と言われたことはあった俺だが、さすがに命を奪う、

ということがどれだけ重荷になるかは理解していたつもりだった。

だが、俺は甘過ぎたようだ。俺の認識よりも遥かに重く、

自分が殺したという事実と、三匹の恐竜の死体が転がっている光景  
が、

俺の心にずっしりと残っていた。

その後樹海に戻り、その日はそのまま休んだ。

〜第二話〜 殺すという事（後書き）

次でようやく原作キャラ登場！

……まあ誰が出てくるか、

予想はついていると思いますが。

すみません、かなり重要なミスがありました。

×生物に干渉することは出来ないらしい。

生物に直接干渉することは出来ないらしい。

〜第三話〜 八意永琳（前書き）

連投！

サブタイトルで誰が出てくるかバレバレですねw

第三話 八意永琳

次の日からまた妖精との修行をして、時折樹海を出て狩りをする、というのが日常だった。肩の傷は起きたら治っていた。

妖精曰く、妖怪は人間よりも遥かに治癒能力が高いらしい。

そして、百年ぐらいの時が流れた。

尻尾は十年に一本ペースで増え、今では十尾となっている。

九尾で終わりじゃなかったのか…

そして尻尾が増えるたびに激痛が走るのとは何かできないものか…

流石に邪魔なのでどうにか出来ないかと方法を探していると、

どうやら尻尾は妖力に変換できるらしく、そのまま体の中に収納できた。

耳も試してみると、同じ原理で収納できた。

これなら髪で側頭部を隠せば人間としても行動できそうだ。

鏡で確認したが本当に不老不死のようで、百年前と姿が変わっていなかった。

人間は少し前に生まれたらしい。(正確には少しだけ違うらしいが…?)

急いで会いに行く必要も無いか、と思つて会いに行っていない。

妖精との修行のおかげで、恐竜の群れも素手で簡単にあしらえるほど強くなった。

能力も使いこなせてきた。最近では自分で戦わずに人形に戦わせる、という戦法も使えるようになってきた。軍隊ぐらいの数の人形と、恐竜の群れが戦っている絵は壮観だった。

最近恐竜の数が減ってきている。その代わりと言うわけではないが、

妖怪を見かけるようになってきた。殺気を放つて威嚇すると、それだけですぐに逃げていくのであまり気にはしていないが、そしていつもの様に修行を終えると、

「それじゃア、アタシの修行はこれでおしまイ」

と、いきなり妖精から告げられた。

「……え？そうなの？」

「えエ、だってアナタもうアタシより強いじゃない」

「いや、まあ確かにそう…なのか？」

そう、実はもう何度か妖精と戦って勝利を収めている。それでもぎりぎりなんとか勝てた、という程度なので自分では少し不安なのだが…

「まあ、妖精がそう言うならいつか」

「えエ、アナタはもう一人で十分生きていけるワ」

「そっか、妖精はこれからどうするんだ？」

「アタシ？アタシは女神様の所へ戻るワ」

「そっか…じゃあ、これでお別れ…なんだよな」

「そうなるわネ。中々楽しかったワ」

「あっさりしてんなあ…」

「うじうじ悩むのは性に合わないんでしょ？アタシもなのヨ。



「ああ、そうダ。ここから北の方角に進めば人の町があるワ」

「北か…わかった。」

「それじゃあ、色々ありがとうございました！師匠！」

「えエ、これからも日々怠けず精進なさいナ。…それじゃあさようなら」

そう言つてニコツと笑つた妖精は光に包まれた。思わず目を閉じてしまい、

目を開けたときにはもう妖精は居なかつた。

よく見ると、地面に何か落ちてている。

コンパスだつた。

「そついや、北つてどつちか分かつてなかつた……」

そんな事だろうと思つたわヨ、と聞こえた気がするが、気のせいだろう。

とにかく街を目指して北に進み、樹海を出て更に進む。

途中、恐竜やら妖怪の襲撃を受けたが、人形に迎撃させた。

しばらく進むとようやく街が見えてきた。だが近づいていくと…

「街？…つていつか、なんだこれ？」

自分が想像していた街とは大きくかけ離れていた。

まるでSF小説や映画に出てくるような未来都市、

というのがぴつたりな光景だつた。

「とりあえず、入つてみるか」

一応、尻尾と耳と妖力を隠して街に入ってみる。  
入る前に検査のような事をされたが、特に問題なく通れた。

「こりゃ…すげえな」

車はタイヤが無く、少し宙に浮いている。

電車は光のレールの様な物に沿って空を走っている。

店の中では人がパフォーマンスをしながら料理を作り、  
ロボットがウェイターをしている。

日本には無かった技術のオンパレードだった。

少し街…というか未来都市の中を歩いていると、

「その貴方」

声を掛けられた。赤色と青色で交互に彩られ、星座の様な模様が入った服に、

赤い十字があしらわれたナース帽の様な帽子を被っている、銀髪の女性だ。

個性的な格好だなと思ったが、美人だし似合っている。

初対面の相手の服にけちを付けるのも失礼だし黙っていた。

「少し付いてきて」

何か威圧的、というか断りづらい空気を含ませた言い方だった。

特に断る理由も無かったので付いていくと、

人気の少ない路地で立ち止まり、話し始めた。

「単刀直入に聞いわ、貴方、人間じゃないわね？」

「！……驚いたな、分かるのか？」

「ええ、うまく隠しているけど、ほんの少しだけ妖力を感じるものなるほど、街に入るときの検査はパス出来たんだがな……」

「……それで？この街に来た目的は何？」

「……どうやら警戒されているらしい。そりゃそうか。他の人間は気付いていないが、妖怪が堂々と街に入ってきているのだから。」

「目的は特に無いな。強いて言うなら観光、かな」

「……は？観光？」

「ああ、観光」

「……」

「……」

「……プツ、アツハツハツハツハ！」

いきなり笑われた。なんだよ畜生。

「変な妖怪ね。普通人の街に来る妖怪なんて、人を食らう事しか考えてないような奴ばかりなのに」

「別に人を食わなくても生きていけるからな」

「本当に変な妖怪ね：警戒していた自分が馬鹿みたい。ねえ貴方、名前は？」

「俺か？俺は狭間妖人だ」

「狭間妖人ね。私は八意永琳よ」

「永琳か、分かった。しかし随分あっさり信じるんだな」

「妖怪だと言いついてられても殺気を放つどころか、警戒すらしないんだもの。畏かと思っただけれど、そのつもりも無さそうだしね」

「なるほどね…」

「随分、楽観的なだね。普通人の街って言うたら、妖怪にとっては餌でもあるけど、敵の巣窟の様なものよ？」

「そうなのか？まあでも、話せば分かるだろう」

「本当に変な妖怪ね、貴方みたいな妖怪ばかりだといいのに」

クスクスと笑い続ける永琳に釣られて俺も笑い、少しの間二人で笑い合っていた。

……しかし俺ってそんなに楽観的かねえ…？

〜第三話〜 八意永琳（後書き）

ようやく永琳が登場。

やごころ 八意って変換できないよね…

〈第四話〉 街での仕事（前書き）

ヒヤッハー！祝日は更新だー！

…いや、祝日に絶対更新するってわけじゃないんですけどね。

STOP THE 誤解！

## 〈第四話〉 街での仕事

二人で少し笑い合った後、永琳に街を案内してもらった。どれもこれもどういう原理なのかさっぱりで、

永琳に説明して貰ってもよく分からなかった。

しかし、なぜ永琳はこんなに詳しいのか？と思い、尋ねてみるとなんとこの街の発明品のほとんどが、永琳が自ら発明したらしい。

宙に浮いている車も、光のレールを走る電車も、

ウエイターになるロボットも全て永琳の発明だとか。

……永琳の頭の中ってどうなってるんだ？

「ねえ、ところで貴方、これからどうするつもりなの？」

「ん、これからか……」

そういえば何も考えてなかった。

この街に来たのも百年ぶりに人間に会いたかっただけだし、目的はもう達成されていた。

なのでこれからの目的は特に無かった。

「特にすることが無いなら、この街に滞在しない？」

「ここにかな？俺、妖怪なんだけど？」

「構わないわ。人間を襲うつもりは無いみたいだし、私以外は妖怪だと気付いてすらいないから大丈夫よ」

「…ならいつか」

「決まりね、住む場所は私の家に来ると良いわ。」

一人暮らしなのに家は無駄に広くて、部屋が余ってるのよ」

「なんか悪いな、そこまでしてもらおうと」

「そう？…貴方ってどのくらい強い？」

「ん？…そうだな、外の恐竜やら妖怪の群れ程度なら目を瞑ってても倒せる」

「…すごいわね、なら頼みたいことがあるの」

「頼みたいこと？」

「ええ、続きは家で話すわ」

そう言っつて永琳は歩き始めたので、俺も付いて行つた。しばらく歩いていると、とんでもない豪邸に着いた。

「……ここが、永琳の家？」

「ええ、そうよ」

「でけえ……」

「そう？」

家の前に何かパネルの様なものがあつた。

永琳がそれに触れると、扉が開いた。



…指紋認証かなんかですか…？

本当にハイテクだな…

家の中も豪華だった。

豪華なソファ、綺麗なシャンデリア、でかいテレビ、

本当に一人暮らしなのか疑いたくなるほどある部屋の数、

どうやらロボットが掃除している様だ。他にも色々あったが、

紹介するのが面倒になるくらい多かった。なのでこのくらいにしておく。

しばらく歩いていると、ある扉の前で永琳が立ち止まり、

「この部屋を使って頂戴」

と、その扉を指して言った。

扉を開けてみると、予想通り豪華な部屋だった。

「豪華な部屋だな…いいのか？使わせてもらって」

「もちろんよ。だめなら案内なんてしないわ」

天蓋つきのベッドだ…

ゲームやアニメなんかでお姫様が使っているイメージしか無かったが、

これを自分で使うのか…

「とりあえず、貴方のデータを登録しないとね」

「データ？登録？」

「家に入る前に私がパネルに触れていたでしょう？」

あれを貴方にも出来る様にするの」

という事で、俺の指紋を登録することになった。  
これで俺も自由にこの家に入出入りできるらしい。  
…ちょっとテンションが上がっていたのは内緒だ。

「さて、それじゃあさっき話していた頼みごとなんだけど…」

「ああ、俺は何をすればいいんだ？」

「一言で言えば護衛ね」

「護衛？永琳の？」

「ええ、私は医者なのよ。正確には薬剤師なんだけどね。  
それで街の外にある薬草とか、色々薬の調査に必要なの。

私一人で行ってもいいんだけど、上層部の連中がうるさくてね…」

「そこで俺の出番ってわけか」

「そついう事。頼めるかしら？」

「任せてくれ。無料で居候させてもらうのは居心地悪いしな」

「ありがとう。それじゃあ早速だけど準備してくれる？  
貴方の事を上層部に報告してくるから。ああ、  
もちろん貴方が妖怪であることは隠しておくわ」

「わかった、先に街の外に行っておくよ」

「ええ、それじゃまた後で」

永琳と別れたあと、先に街の外に出た。  
しばらく待っていると、永琳がやってきた。

「悪いわね、待たせちゃって」

「気にすんな、たいして待ってないから」

「ありがとう。ああ、それと貴方の事だけど、  
上層部には別の街から来た旅人で、護衛として私が雇った、  
という風に通しておいたわ。何も無いと思うけれど、  
何か聞かれるような事があつたら適当に話しを合わせておいて頂戴」

「了解、んじゃ早速…どこに向かうんだ？」

「ここからしばらく南に進んだ場所にある樹海よ」

「え？それって…」

永琳と一緒にしばらく歩いていくとやはり、  
到着したのは俺が妖精と修行していた樹海だった。

「この樹海で取れる薬草は色んな薬に使えるのよ」

「へえ、そうだったのか…」

「いや、それは良いんだけど…」

「なあ、永琳」

「何？」

「ふと思ったんだけど…俺いらなくね？」

永琳は涼しい顔で恐竜や妖怪を弓で撃ち落としていく。  
はつきり言って俺の出番はまったく無い。

「だから言ったでしょう？私一人でも良いんだけどって」

「いやまあ、確かに言ってたけど…」

「上層部は私に怪我をされると困るんでしょうね、  
万が一の可能性も消しておきたかったんでしょう」

永琳は少し眉間にしわを寄せてそう言った。

「永琳は、その上層部の連中が嫌いなのか？」

「ええ、嫌いね。あいつらは私を都合のいい道具程度にしか思っ  
ていないわ。」

街の発明品だって私自身の意思で作ったものはほんの一握りよ。  
ほとんどが命令で作られた物ばかり」

「なら永琳は、なんでその上層部に従ってるんだ？」

「上層部には両親が居るのよ。もちろん、両親は私に命令なんてし  
ないわ。」

私に命令するのは両親の上司。両親は私を庇って、  
命令の数を減らしてくれているけれど、それでも庇いきれないのよ」

「…なるほどね…」

胸糞悪い話だ。恐らく永琳があんな豪華な家に住んでいるのは、

永琳の両親のおかげなのだろう。だがその代わり、何の役にも立たない上の命令に従わなければならない。

「……実はね」

「ん？」

「上層部はあの街を捨てるプランを立てているの」

「街を捨てる？そりゃまたなんで？」

「地上が穢れで満ちているから、と言っていたわ。だから地上を捨てて月へ行く計画を立てているの」

「月！？月ってあの夜の空にある月のことか！？」

「ええ、地上の穢れを祓うことは最早不可能。

だから地上を捨て、月を目指す……と結論付けたそうよ」

「……なんとも傲慢な話だな」

「……本当にね。」

「……ねえ」

「ん？」

「……いいえ、なんでもないわ。

薬草は集まったし、そろそろ街に戻りましょう」

「ん、ああ、わかった」

永琳が何か言いかけていた様だが、無理に聞くのも悪いかと思い、何も聞かないでおいた。

……余談だが、帰り道も俺の出番は無かった。

〜第四話〜 街での仕事（後書き）

永琳の両親やら上層部やらは  
独自設定です。

そして狭間が役立たずw

く第五話く 街での日常（前書き）

たっぷりネタが浮かんだので連投



## 〈第五話〉 街での日常

永琳の家に居候を始めてそろそろ一年の月日が経つ。  
最初の頃はやる事がほとんどなく、

永琳が薬草を取りに行くときに護衛をするくらいだった。  
料理や洗濯、掃除なんかはロボットがやってくれる。  
ぶっちゃけ、すげえ暇だった。なので、

永琳に護衛以外に何かすることはないか聞いてみると、

「じゃあ、薬の勉強でもする？」

と言われ、薬草や調合の勉強をする事になった。

護衛として付いて行った時に薬草の成分や見分け方などを教わり、  
家に戻ってきて、永琳に時間があるときは薬の調合のやり方を教わ  
った。

そんな事を繰り返していると、永琳の薬のレパトリーの大半を覚  
えた。

今では永琳の仕事を少し手伝っているくらいだ。  
やはりこれも能力のおかげだろうか？

そしてある日、仕事から帰ってきた永琳から話があると告げられ、  
今俺は永琳の部屋にいる。

「で、話つてのは？」

「ええ、一年ほど前に月へ移住する計画がある、  
つて話をしたわよね？」

「ああ、はつきり覚えてる」

「その計画の実行日時が今日決定されたの」

「!.....そうか」

「計画の実行は丁度一年後の今日」

それまで私は仕事が増えるから、

しばらくはこの家には帰って来れないわ」

「なるほど...」

「それで、計画実行までの間の貴方の仕事なのだけれど、新しい仕事を用意したわ」

「新しい仕事？」

「そう、最近妖怪が活発になってきているのを知っているかしら？」

「ああ、なんか街でも噂になってるな。

以前、一度街に侵入されたとかいう話を聞いた事がある」

「ええ、だから貴方にはこの街の防衛隊に入ってもらいたいの」

「防衛隊か...なるほど、俺にはうってつけだな」

「なら...頼めるかしら？」

「もちろんだ。永琳の頼みとあらば断るわけにはいかないな」

「フッフ...、ありがとう」

こうして俺は防衛隊として働く事になった。

防衛隊の人たちは優しく良い人たちばかりだった。

妖怪の襲撃も活発になって来たとはいえ、

俺一人で十分片付けられる程度だった。

永琳から怪我人の応急処置のやり方なんかも教わっていたので、衛生兵の手伝いなんかもしていた。

やりがいはあるがかなり忙しく、

あっという間に月日が過ぎていった。

そして永琳から防衛隊の入隊を勧められてもうじき一年が経つ。もうすぐ月への移住計画が実行される。

街の人々は月への移住に不安を覚えたり、

妖怪の襲撃に怯えなくて済むと喜んでいたり、様々な声が上がっていた。

そんなある日、俺はもう一度永琳に呼び出された。

「よっ、永琳。久しぶりだな」

「久しぶりね、狭間。元気だったかしら？」

「もちろん。外の妖怪相手にへまなんてしないさ」

「頼もしいわね。防衛隊の噂はこっちまで届いているわよ。」

妖怪の群れを一人で撃退した、とか」

「ああ、あの時の防衛隊の隊長の顔ときたら…」

永琳にも見せてやりたかったな」

そんな他愛も無い話をしばらく続けていると、不意に永琳が真面目な顔になり切り出した。

「ねえ、狭間。もうすぐ月への移住が始まるわ」

「ん、ああそうだな。街の人々もなんとというか、浮き足立ってるって感じだな」

「ええ…それで狭間、貴方はどうするつもりなの？」

「俺？そうだな…」

そういえば考えていなかった。

当然、地上の生活のほうに慣れている。

月ではまともな重力なんてないし、生活し辛そう、

というイメージはある。逆にそんな生活も興味はあるのだが。

でも恐らくこのチャンスを逃したら、月なんて滅多に行けないだろう。

彼はそう結論付けた。

「俺も月にいきたい」

「ねえ、ひよっとして今決めなかった？」

「ん？そうだけど？」

「…二年前と変わらないわね、貴方は。

安心したような、呆れたような…」

「当然だ。一年や二年そこらで性格変わったりはしないさ」

胸を張ってそういうと、永琳にクスクスと笑われた。

「うん、よしよし」

「…？ 何が？」

「いや、なんか永琳が疲れた顔してたから」

「…！…ごめんなさい、気を遣わせて」

「気にしない気にしない。それに、そういう時は謝るんじゃないかなって…」

「ありがとう…ね」

「その通り！」

そうして永琳と二人で笑い合っていた。

そっぴゃ、会ったばかりの時もこんな感じだったなあ、とぼんやり思い出しながら。

「それじゃあ、貴方も月への移住を望んでいる、と上層部に伝えておくわ」

「ああ、よろしく頼む」

そしてまた、いつもの日常へと戻っていった。

だけど月への移住の日、あんなことになるなんて、この時は想像もしていなかった…

く第五話く 街での日常（後書き）

ちよつと展開が速すぎたかもしれない…

〈第六話〉 襲撃、防衛（前書き）

さらに連投

## 第六話 襲撃、防衛

いよいよ月への移住計画の実行まであと三日となった。街にはもうほとんど人の姿はなく、閑散としていた。

残っている人々も防衛隊が護衛しながら、移住センターへと移動している。

なぜ街の中でまで防衛隊の護衛が付いているのか。

それは最近の妖怪の動きが不穏に感じられたからだ。

つい先日まで妖怪はこの街へ襲撃を仕掛けてきていた。

だが、その数は少数。しかも少し攻撃を加えようとすぐに逃げていく。そして最近ではその襲撃も無くなっていた。

これは妖怪が偵察に来ていたのではないか？

我々人間の戦力を測っていたのではないか？

つまり、近いうちに妖怪の大群がこの街に押し寄せてくるのではないか、

という結論に到った上層部はリーダーなどの改良を進め、

街の外への警戒を強めた。防衛隊は街の中の巡回に回され、

移住センターを中心に住民の安全の確保を最優先としている。

今のところ妖怪が襲ってくるような動きは無い。

しかし、計画実行の前日の夜、

恐れていた事態が発生した。

大量の妖怪が群れを成してこちらへ向かっているとの報告があった。

俺は移住センターでその報告を聞き、急ぎ妖怪の元へ向かおうとした。

「狭間！」

と、その時、不意に呼び止められた。



「永琳か」

呼び止めたのは永琳だった。

「妖怪が群れを成してこちらへ向かってるって報告を受けて…」

「ああ、俺も聞いた。永琳、これじゃ計画の実行を明日にする、なんて悠長な事言つてられないぞ！」

「ええ、ロケットの最終調整を急いで終わらせるわ。それまで持ちこたえて頂戴」

月への移住はロケットで行われる。

ロケットは十台。全て発射されるまで妖怪を食い止めなければ…！

「任せとけ！」

そう言つて俺は全速力で外へ走つて行つた。

まずは監視塔へ向かう。

そこで街の外への警戒が行われている。

敵の勢力もおおよそ分かるだろう。

監視塔に着き、その職員に話しかける。

「状況は!？」

「狭間さん！妖怪の勢力はおおよそ一万と観測されています。

既に本隊が防衛に向かいましたが、あまり長くは持たないかと…」

「そうか、分かった。

俺もすぐに向かおう！」

「狭間さん！これを持って行ってください！」

「これは？」

「通信機です。住民の脱出が完了したら報告します。

報告があつたらすぐに戻ってください。

ロケットに乗り遅れたら置いてけぼりになっちゃいますよ」

「なるほどな、サンキュー！」

そう告げた後、俺は街の外へ飛び出した。

地平線が妖怪の群れで埋め尽くされている。

どうやら先発した本隊は全滅したらしい。

だが、狭間にとってその方が好都合だった。

「そんじゃ、久々に暴れますかね！」

能力で作り出した人形に戦闘のプログラムを付与し、俺自身も戦闘体制に入る。

「ここならいけるよな…？」

街から十分離れたし、これだけ大量に妖怪がいれば、

妖力を開放してもばれないだろう。

久々に十本の尻尾と全妖力を開放する。

妖怪の群れもこちらに気付いたようだ。

〈第六話〉 襲撃、防衛（後書き）

防衛隊は本隊と分隊に分かれています

本隊は街の中で待機、分隊は住民の避難って感じですよ

ちなみに狭間は本隊所属

優秀な戦力なので

襲撃までは移住センターの防衛を任されていました

く第七話く 結末（前書き）

連投ラスト

技の名前は超適當w

格好良い名前が思いつかない…

〈第七話〉 結末

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

妖怪の群れが咆哮をあげながら向かってくる。

焦らず、まずは遠距離から敵の数を減らす。

あれだけ固まっていれば避ける事はできないだろう。

「十尾妖光線！」

十本の尻尾の先から妖力で作った極太のレーザーを放つ。

妖怪の群れはまともに食らい、五分の程度の数がこの攻撃で死滅した。

「よし、そんじゃあ突撃だ！」

人形と共に妖怪の群れに突っ込む。

狭間の殺気と妖力の大きさに気圧されている者も居たが、

果敢に挑んでくるものも居た。

挑んできたものを能力で作り出した刀で切り捨て、

銃を作り出し、妖怪を撃ち殺していく。

人形たちも次々に妖怪を殺していく。

時折反撃されたが直撃はせず、かすり傷程度だった。

後ろを振り返ってみると、一台のロケットが空を昇って行ったのが見えた。

「うっし、あと九！」

ロケットを確認した後すぐさま戦闘に戻った。

破壊された人形を修復しながら妖怪を薙ぎ倒していく。刀で切り伏せ、銃で撃ち殺し、妖力弾で打ち落とし、時には拳で、蹴りで相手を殺す。そうしてしばらく戦っていると、懐から振動を感じた。通信機だ。

「こちら狭間！」

「狭間さん！住民の避難は完了しました！すぐに街へ戻ってください！」

「了解！」

とはいえ、この妖怪の群れをこのままにしておくわけにはいかない。

「広域禁縛結界！」

動きを封じ込める事を目的とした結界で妖怪を押さえ込む。だが、これはあまり長い時間は持たない。

急いで街に戻らなければ…！

新しく”結界が解除された後戦闘に入る”様に設定した人形を作り出し、

街へ全速力で引き返した。

街に戻り、ロケットの発射台にたどり着いた。

どうやら後は俺だけのようだ。

だがその時、複数の銃声が響き、同時に体に激痛が走った。

「がっ…はあっ…!?!？」

ただの銃で撃たれたわけではない。永琳が発明した光線銃だ。胸と四肢を撃ち抜かれ、思わずその場に倒れ伏してしまった。そして、何事も無かったかのように最後のロケットは、狭間を置いたまま発射されていった。

「なっ…！？おっ、おい！！」

状況が理解できなかった。

なぜ俺は撃たれている？

なぜ俺は倒れ伏している？

なぜ俺だけ置いて行かれた？

後ろを振り返ると光線銃を持ったロボットが複数立っていた。

「くそっ…！」

妖力弾で全てのロボットを破壊する。

どうやら本当に俺以外は脱出したらしい。

するとロケットが発射された場所に映像が流れ始めた。

白衣を着ていて、髭を生やした初老の男だ。

「やあ、ご苦労だったね狭間妖人君」

一度だけ会ったことのある人物だった。

確か、永琳が大嫌いだと言っていた上層部の一人だ。

なぜ俺が会ったことがあるかというと、実は、

永琳が俺のことを上層部に話したとき、俺に直接会いたい、  
と言い出したやつが居たらしい。それがこの男だ。

何を考えているか分からない気味の悪い男、といった印象だった。

「恐らく、今頃君は光線銃で撃ち抜かれ、倒れている頃だろう。」

悪く思わないでくれたまえ、悪いのは我々を騙した君なのだから」

「どういうことだ？こいつは何を言っている？

騙した？俺が？いつ、どこで、誰を？」

「妖怪達の動きを知るためにリーダーが改良された事は君も知っているね？」

その改良されたリーダーがとても微弱な妖力を感知したのだよ。

驚いた事にそれは君の身体から感知された。

我々は眼を疑った、なぜ君から妖力が、とね。

だが考えてみれば簡単な話だ。君の正体は妖怪であり、我々を騙していたのだ」

「違う！俺はお前達を襲うためにこの街に来たんじゃない！」

だが、映像は通信ではなく録画されたもののようなのだ。

男は淡々と話を続ける。

「そして我々は八意氏に提案した。彼をこの街から追い出すべきだと。

だが八意氏は頷かなかった。なぜなら、

今彼に刺激を与えては暴れだす可能性がある。

我々に協力してくれるのならは利用出来る限り利用して、地上に置き去りにすればいい。そう考えていたからだ」

耳を疑った。永琳が俺を利用した…？

リーダーが改良されたのは最近だ。だが永琳は最初から俺を妖怪だと気付いていた。

なら、永琳は最初から俺を利用するつもりでこの街への滞在を提案したのか…？



「我々は八意氏の考えに賛同した。

そして君は我々の計画通りに動いてくれた。妖怪を食い止め、ロケット発射までの時間を稼いでくれた。本当に感謝しているよ。だが、穢れている妖怪を月に連れて行くわけにはいかないんだ。だが、我々も鬼ではない。このままでは無残にも君は妖怪の群れに殺される。

だから我々はその街に爆弾を仕掛けておいた。妖怪の群れに反応して起爆する仕組みだ。君も妖怪だろう？なら、妖怪は妖怪同士で仲良く天に召されるといい。さようなら、狭間妖人君」

その言葉を最後に映像は途絶えた。遠くから小さくだが妖怪の咆哮が聞こえる。

どうやら結界が破られ、人形もやられたらしい。

まずい、このままでは妖怪の群れもろとも爆破される。なんとか動きたいが、身体がピクリとも動いてくれない。

永琳が開発した光線銃は対妖怪用の特別製だ。

妖怪の治療能力でもそう簡単には治らない。

逃げるのは間に合わない。ならば、全力で防御するしかない。俺は何重にも結界を作り出し、妖力を注ぎ込んでいく。

尻尾で身体を包み込み、出来る限り身を縮みこませる。

そして数分後…

轟音と共に視界が真っ白になり、

俺は意識を失った…

く第七話く 結末（後書き）

置いてけぼり狭間

く第八話く　これから（前書き）

なんかいつも以上にgagagagaになってしまった

く第八話く　これから

「うっ……ぐっ……」

体中が痛い、頭がまともに働かない。

ここ……どこだっけ……

目の前に広がる光景は瓦礫の山。

あれだけ発展していた街が見る影も無く崩壊していた。

「そうか……爆弾が……」

少しずつ思い出し出てきた。俺は月への移住に置いていかれて、街に攻めてきた妖怪の群れもろとも爆破されたんだった。

首はなんとか動く。しかしそこから下はびくりとも動いてくれない。

自分の身体を見ると全身酷い火傷だ。胸の部分には穴が開き、

四肢は千切れている。他の箇所より損傷が酷いのは恐らく、

光線銃で撃ち抜かれたせいだろう。

千切れた四肢は完全に溶けてしまったのか、千切れた先は見当たらない。

「とにかく……移動しないと」

一応、傷の修復は身体が勝手に始めてくれている。

だが、出血が酷く放っておくのはまずい。

人形を一体作り出し、自分を担がせて運ばせる。

しばらく移動すると、少し小さい洞窟を見つけた。

「ここなら……休めそうか？」

人形の手の先に明かりを灯し、中へ進む。  
入り口の狭さとは逆に、中はかなり広かった。

「よし…ここなら…」

まずベッドを作り出し、人形を使いそこに自身を寝転ばせる。  
もう一度自分の身体を見直してみると、火傷のほうは問題なさそう  
だ。

黒く焦げた皮膚の下から新しい皮膚が作られている。  
改めて妖怪の治癒能力に驚かされる。

胸の穴も塞がりだしているし、四肢も再生を始めている。  
胸の穴は心臓とは逆の部分だったのが幸いした。  
流石に心臓を撃ち抜かれていたら、今こうして生きてはいないだろ  
う。

永琳直伝の止血剤と消毒液を作り出し、傷口からの出血を抑える。  
抑えきれない部分は包帯を作り出して巻いたり、  
多少強引だが結界を作り出し、無理やりにも血を抑える。

「とりあえずは、これで大丈夫か…」

妖怪でなければ確実に死んでいただろうと考えるとぞっとした。  
実は狭間以外の妖怪は全滅している。永琳特性の対妖怪用の爆弾は、  
霊力も込められていた。並みの妖怪に耐えられる威力ではない。  
耐えられる妖怪も居たのだが、その前に狭間が殺してしまっていた。  
生き残れたのは修行のおかげでもあったのだが、本人は気付いてい  
ない。

しかし生き残れたのは良かったが、これからどうしようか？  
しばらくの間は身体を休めるしかない。今は動きたくても、  
身体が言う事を聞いてくれないのだから。人形を使えば動けるが、  
そこまでして動く必要も無い。急ぐ理由も無い。

永琳達を追いかけようと思っても流石に月、となると追いかけるわけにはいかない。

というか、行けない。いくら妖怪とはいえ、生身で宇宙空間に出て無事でいられるはずが無い。

永琳達を追いかけるのは却下。追いかけても歓迎されないだろうし。となると、目的が無くなってしまった。

どの道しばらくの間怪我で動けないのだし、しばらくの間眠る事にしようか。

永琳に裏切られた事は少なからず精神にもダメージを与えている。少し、一人になりたいと思うことは俺にだってあるのだ。

「しばらくの間は、怪我の治療兼睡眠…ってか封印かな」

まあ、しばらくの間眠るのも悪くないだろう。

いきなり別の世界に連れてこられて、楽しかった事はたくさんあったが、

疲れが溜まっているのだろう。少し休みたい。

自分に触れれば解除される簡単な封印を施し、狭間は永い眠りについた。

く第八話く　これから（後書き）

2011/11/08

大幅に修正しました。

今後このような事が無いよう気をつけたいと思います。  
申し訳ありませんでした。 m ( ) m

く第九話く 目覚め(前書き)

やっと二人目の原作キャラ登場  
幻想入りはいつになるかな…



## く第九話く 目覚め

パキン、と甲高い音が聴こえた。

それと同時に少しずつ意識が回復していく。

目を開けると目の前には女性が居た。

青い髪、赤い服に銅鏡を付け、スカートを履いている。

そして背中にはぶつとい注連縄を背負っている。

…永琳以上に个性的だな、と、ぼーっとした頭で考える。

もちろん、声には出さない。

目の前の女性は驚いた顔をしているが、とりあえず無視して辺りを見回す。

俺が自分に封印を施したあの洞窟だ。

違いがあるとすればいくつか松明が灯されている事ぐらいか。

「ふああああ、よく寝た」

欠伸をしながら体を伸ばす。そして目の前の女性に問い掛ける。

「あんたかい？俺の封印を解いたのは」

「…どうやら、そのようだな…！」

…あれ？なんか警戒されてる？

って、当たり前か。俺妖怪なんだから。

時々自分が妖怪だって事忘れてるなあ…しっかりしないと。

「って、どわあっ!？」

目の前からとんでもないスピードで何かが飛んできた。

慌てて首を捻って避ける。

「あつぶねえな！いきなり何しやがる！」

「妖怪だろう？なら、討たれても文句はないだろう」

「いや、確かに妖怪だけでも…っっておわっ！」

またでかい何かが飛んでくる。今度は確認できた。でかい柱だ。さつき飛ばしてきたのはでかい柱だったのか。

いやいや、冷静に分析してる場合じゃねえって！どっから出したんだあんな柱！

「ちよつと待て！別に俺はお前を襲うつもりなんかねえって！」

「私を襲わない、か。どうせお前達妖怪は人を襲うだろう！」

「いやいや、人間も襲わねえから！」

「嘘をつけ！妖怪は人を襲うものだ！」

「襲わないのも居るって！頼むから落ち着け！」

話し聞いてくれねえし、次から次へと柱飛んでくるし、起きて早々なんだこりゃ！？

しかし、まるで自分が人間じゃないかの様な口ぶりだな。

この女と、この女が出した柱から感じた事のない力を感じるし…何者だこいつ？

ん？なんか、この力と同じ力が俺にもある様な…なんだこれ？

「なっ！？それは神力！？」

あ、わざわざ教えてくれた。そうか、これが神力か。つて、俺信仰される様な事したっけ…？

「……なぜ、妖怪が神力を？」

「さあ？俺にもわからん」

「貴様…何者だ？」

「狭間妖人。種族は人狼…かな」

「なっ、お前がああ狭間妖人だと！？」

「…？ どの狭間妖人かは知らんが、俺の名前は確かに狭間妖人だ」

「馬鹿な…妖怪だったのか…」

「ていうかなんで俺のことを知ってるんだ？」

「…ここにはかつて人の都市があったと聞いている。

その都市は他の集落とは比べ物にならないほど発展していた。

そしてその都市の人々は地上を捨て、月へ移り住んだ。

その都市の防衛隊の名簿があったのだが…」

「その中に狭間妖人って名前があった、と」

「ああ…お前が、そうなのか？」

「ああ、その通りだな。しかし、どこでその名簿を？」

「都市の残骸はほんの少しだが残っている。

そこから当時の資料が発見された。得られた情報は今の話し程度だかな……」

「なるほどねえ……」

月に行った人たちの中に妖怪だと知っても俺を信じてくれている人達がいただらうな。

おそらく、俺が死んだ（と思っている）から神様として信仰の対象になった。

それで俺に神力があるんだろう。でなきゃ説明が付かない。

ちよつと嬉しいな。利用しようとしていた奴らばかりじゃ無かつたって事だよな。

そんな事を考えていると、目の前の女性は戦闘体制を解いていた。

「いきなり攻撃して悪かつたね、あんたがあつた狭間妖人なら警戒する必要もないだろう」

「あつさり信用するんだな。偽者かもしれないぜ？」

「私の御柱を軽々避ける位強いし、なにより神力を持つてる妖怪なんてあんたくらいさ。

人間じゃなかつたのは驚いたがね」

「そりゃそうか。ところであんたは？」

「つと悪い。名乗ってなかつたねえ。

私は八坂神奈子。大和の地の神さ」

そついや、こいつも神力使ってたな。神様を見たのは初めてだが、見た目は人間と大して変わらないんだな。

「八坂か、よろしくな。しかし最初と口調変わってないか？」

「あんた相手に威厳を保つてもしょうがないだろう？ 普段はこの口調なのさ」

「そうか、まあ堅苦しいのよりはいいか」

「寛大だねえ、男はそうでなくちゃ。ところで、もし良かったら私の神社に来ないかい？」

色々話を聞いてみたいんだ。特に当てもないだろう？」

「まあそれはありがたい話だが…、いいのか？ 俺妖怪だぞ？」

「神力を持っているから神の素質もある。それで反対するやつなんざいないさ」

「そうか、ならお言葉に甘えようかな」

こうして、八坂の神社に行くことになった。

洞窟を出て、当然のように空を飛ぶ八坂をみて驚いた。

「空飛べんのか！」

「…？ 当然だろう。飛べないのかい？」

「ん、試してみる」

能力で自分にかかる重力を消して、推進力を生み出す。少しバランスを取るのが難しいが、なんとか飛べた。と思った矢先にバランスを崩して頭から地面に落ちた。

「アツハツハツハツハツハツハ！！」

思いつきり八坂に笑われた。畜生……

その後何度か地面に頭をぶつけながら八坂の神社に向かった。

もちろん、頭をぶつけるたびに八坂に大笑いされたのは言うまでも無い。

空を飛ぶ練習をしようと誓った狭間であった。

く第九話く 目覚め（後書き）

神奈子「諏訪子だと思ったか？私だよ！」

神奈子の口調ってこんなんだっけ…

こまけえこたあいいんだよの精神でお願いします

〈第十話〉 狭間の実力（前書き）

忘れてませんか？

うちの狭間君はかなり規格外です



第十話 狭間の実力

「うー…頭が痛え…」

地面に頭をぶつけた回数が二桁にさしかかった辺りで目的の神社に着いた。

隣では神奈子が腹を抱えて小刻みに震えながら歩いている。

「……おい、神奈子。いつまで笑ってんだよ」

「い、いやあ、悪い悪い。でもやっぱり…ぶくく…」

神奈子からすれば、自分よりも遙か昔から生きていて、自分よりも遙かに強く、

その上妖怪なのに神力まで持っているという規格外な存在であるにもかかわらず、

空を飛ぶ、という自分達には出来て当たり前前の事がまともに出来ない、

というのが意外だった。それだけではなく、空を飛ぶのに必死でバランスを崩し、

頭を地面にぶつけている大妖怪の図は可笑しくて仕方なかったのだ。

「力だけで言えば私よりも遙かに上だっていうのにねえ…くっくっく」

「うるさいなあ…飛んだ事なんて無かったんだから仕方ないだろ。鳥でもないのに飛べるほうがおかしいんだよ」

街に居た頃は空を飛ぶ機会も無く、練習する機会もほぼ無かった。

時間が無かったわけでも、空を飛びたくなかったわけでもないが、別に飛べても飛べなくてもいいか、ぐらいにしか考えていなかった。走ったほうが速いという事もあったし、防衛隊に入ってから、永琳の護衛をしていた頃よりも忙しくなり、空を飛ぶ事を考える余裕も無くなっていた。

「ほら、いつまでも拗ねてないで、着いたよ。ここが私の神社だ」

「拗ねてない！まったく、しかし結構でかい神社だなあつと！？」

喋っている途中で色んな方角から色んな形をした神力の塊が飛んできた。

「神奈子様！ご無事ですか！？」

「おのれ妖怪！神奈子様から離れる！」

殺気の込められた視線が四方八方から降り注ぐ。

色んなやつが出てきた。神力を感じるから全員神なのだろう。

俺の神力はかなり少ない上に、妖力が多すぎるせいで気付かれていない様だ。

どうやら神奈子を脅してここへ連れてこさせたと思われるらしい。

すると、神奈子が小声で話しかけてきた。

「ねえねえ、あなたの实力見せてくれないかい？」

「は？…俺は構わんが、あいつらお前の仲間じゃないのか？」

「あなたなら、殺さない程度に手加減くらいできるだろう？」

「…おい、お前まさか最初からこうするつもりだったんじゃ…」

「さあてねえ」

「聞いているのか！神奈子様から離れると言ってるんだ！下賤な妖怪風情が！」

はあ、と一つ溜息を吐き、戦闘体制をとる。周りに居る奴らの神力を測るが、

大した事は無い。尻尾の開放も必要なさそうだ。しかし、数が多い。この人数を自分一人で相手するのは面倒だ。

能力で数体人形を作り出し、武器を構えさせる。

殺気を込めて睨み付けると、それだけで周りの神が目に見えて怯えだした。

「おいおい、頼りねえなあ…」

妖力弾を周りの神に向かって放つ。避けた奴もいるが、ほとんど直撃。

人形を突撃させながらさらに妖力弾を放つ。

妖力弾を避けきれない奴や避けても人形に追撃される奴ばかりで、大半が片付いた。残っているのは数名だけだ。

「神様つてのはこんな程度なのかよ？」

両手を広げ、笑いながら残っている数名を挑発する。

「貴様あ！」

怒りに燃えた表情で全員がこちらに突っ込んでくる。怒りに任せた行動だったためか、ただ前から真っ直ぐに突撃してくるだけだった。

それでも並みの妖怪なら十分に脅威となる威力と速度なのだが、狭間からすれば子供が玩具を持って走ってくる程度にしか思えなかった。

「こんな安い挑発に乗ってんじゃねえよ、隙だらけだぞ？」

攻撃を避けて横に回り込み、気絶程度で済むように手加減して妖力弾を放つ。

避ける事も防ぐことも出来ずに直撃した神は、そのまま気絶した。

「…とんでもないねえ、あんたが本当に敵だったらと思うと背筋がゾッとするよ」

「力自体はそこそこあるみたいだが、防御が甘いな。」

それと、すぐに熱くなって冷静さを欠くのはよろしくない」

「いや、あんたが冷静過ぎるんだよ。攻撃力も桁違いだし…」

神の突撃をあんなに淡々と冷静にいなせる奴なんてあんたぐらいだよ…」

「そうか？真っ直ぐ突っ込んできただけだったから簡単だったぞ？」

「普通は無理だよ…それになんだい？あのとんでもない殺気は…」

直接向けられた訳でもないのに、いやな汗掻いちゃったよ…」

「あんな程度の殺気で怯えてるんじゃまだまだだな」

「…もう深く考えない事にするよ…」

神奈子は、いくら規格外とはいえあれだけの神力を持った神の軍勢相手なのだから、

少しはいい勝負が出来るだろうと思っていた。

だが実際はいい勝負どころか、圧倒的な敗北で終わった。

あのとんでもない殺気を感じた瞬間、

これがついさつきまで空をまともに飛ばず、頭をぶつけていた奴と同じ奴なのか。

私に笑われて拗ねていた奴と同じ奴とは到底思えなかった。

私達が束になった程度じゃ絶対に勝てないと悟った。

今は収まっているが、あの殺気にあてられた時は足の震えが止まらなかつた。

しかも狭間は相手が死なない様に手加減していたのだ。

もし狭間が本気になったらどうなるのか。

もし狭間が躊躇無く命を奪いに来ていたらどうなってしまうていたのか。

考えただけで背筋が凍りつく。

こいつだけは敵に回しちゃいけないね…

そう思った神奈子だった。

「ところで気絶した神達はどうするんだ？」

「あ……………」

「……………」

「……………」

「……………はあ、手伝うけど、ちゃんとお前も運べよ？」

「あはは…悪いね」

今度から神奈子の提案を軽々しく受けないようになしよう…  
そう決意した狭間だった。

〈第十話〉 狭間の実力（後書き）

ちよつと格好悪い場面が続いたので  
イメージ修正……出来たかな？

〈第十一話〉 信仰のために(前書き)

今回いつもおなじと長くなっちゃった



〈第十一話〉 信仰のために

数十分かけて気絶した神達を運び終わった狭間と神奈子は、神社の中でお茶を飲んでいた。

「あ〜… やつと運び終わった…」

「すまないねえ、まさかあそこまで一方的に負けると思ってなかったんでね…」

「まあいいけどさ… 割と速く運び終わったから」

「お前さんの能力は便利だねえ。人形のおかげでかなり速く済んだよ」

「そっぴゃ、神奈子の能力って何なんだ？」

「私の能力は乾を創造する程度の能力さ」

「乾……？ ってなんだ？」

「乾つてのは八卦の一つさ。天つて意味だね」

「天を創造……？ …… よくわからん」

「私は風神だからねえ、風を操ったりする延長で天候を操ったり出来るのさ」

「へえ〜、お前も能力だけで言えば十分規格外だと思うぞ」

「あつはっは、確かにそうかもしれないねえ」

能力について話していると外から叫び声が聞こえてきた。

「神奈子様あー！」

「おや、起きたようだね」

「回復速いなおい……」

「そんじゃ、ちょっと事情説明してくるかね」

「俺は行かなくていいのか？」

「いや、今行ったらまた混乱するだろうからねえ。事情の説明が終わったら呼びに来るよ」

「了解。お茶のおかわりもらうぞー」

好きなだけどうぞ。と言い残し神奈子は部屋を去っていった。

外からは、神奈子様ご無事で！とか

あの妖怪はいつたい何者なのですか！とか

まさか神社を乗っ取るつもりなのでは！？とか

色んな叫び声が聞こえてきた。

…第一印象最悪だな。…当たり前か。

自分達の仲間が捕まってる(様に見えた)わ、しかも妖怪だわ、

大勢で挑んだにもかかわらず軽くあしらわれたわ、

そりゃ嫌われるよなあ…ん？

そっぴい神奈子って神奈子様って呼ばれてたな。

じゃあ神奈子って、あの神達をまとめてる親玉みたいなもんなのか。とぼんやり考え、まあどうにかなるかという結論に行き着き、お茶を飲んだ。

「はぁー…お茶がうまい」

爺くさいかなあと思ったが、恐竜が生きてた様な時代から生きてるし、

実際爺だからいつか、と開き直った。

段々外から聴こえてくる声が変わってきた。

あれがああ狭間妖人！？とか、

どうりで強いわけだ…とか、

そついえば微かに神力を感じるぞ…とか。

神力に気付ける奴がいたのはちよつと意外だったな。

そんな事を考えていると神奈子が戻って来た。

「お待たせ、説明終わったから出てきておくれ」

「大丈夫なのか？」

「いきなり襲い掛かってくるような事はしないさ。しても無駄だと分かってるだろうしね」

「それならいいが…」

神奈子の後に付いていくと広い部屋に着いた。神がずらつと並んでいる絵は中々壮観だった。

見た目は格好いい奴が多いんだが…何故かそんな奴に限って俺を見て怯えている。

はつきり言っただけ無しだった。こつちを睨んでる奴や、

あれがあの狭間妖人か…とキラキラした目で見てくる奴もいた。転校生ってこんな気分なのかね？転校した事無いから分からないけど。

「神奈子から話は聞いたと思うが、俺が狭間妖人だ。

いきなり攻撃して悪かったな。だが文句は神奈子に言ってくれ」

俺がそう言つと神達は神奈子を見た。神奈子は苦笑いしながら顔をそらしていた。

「ま、まあその話は後でするとして…狭間はしばらくここに住む仲間だから、みんなよろしく頼むよ」

「招待するだけじゃなかったのか？いつの間に滞在する事になったんだよ」

「当ては無いんだろう？ならいいじゃないか」

「まあ別に構わないけどさ…」

神達の反応は様々だった。

あの狭間妖人がここに住む…！？とか

大丈夫なのか？妖怪だろう？とか

機嫌損ねて殺されたりしないよな…？とか。

…最後の奴情けなさ過ぎるだろ。お前本当に神か？

「なあに、悪い奴じゃあないし心配は要らないさ。神力もあるから神の素質もある」

「まあ、よろしく頼む」

こうして神奈子の神社に住む事になった俺だが、流石に何もしないわけにもいかないの、なにか手伝える事がないか神奈子に聞くと、

基本的に神の仕事は信仰を得る事だから、人間の村の人達の願いを聞いてやって欲しい、

ただ妖怪である事を隠しておくことを忘れないように、と言われた。村の人たちの願いは簡単な物はいなくなった猫を探して欲しいとか、願いと言うかお手伝いのようなもの。

難しいのは妖怪にさらわれた子供を助けて欲しいなどだった。

まあ、俺からすれば難しくは無かったので人々の願いを受けていると、

最初は神の使いとか言われていたのだが、どうやら最近俺自身も神と思われているらしい。

俺も信仰されているらしく、神奈子と俺の神力がぐんぐん増えていった。

何故神奈子の神力まで増えたのか疑問だったが、簡単な話だった。

人々は感謝の念を神社で伝える。神社で伝えられた感謝の念は信仰になり、

その信仰は俺自身と神社の主である神奈子に流れるようになっていく。

つまり、神社への信仰は神奈子への信仰にもなるのだ。

もちろん、神奈子も何もしていなかったわけではないが。

最近では周りの神にも受け入れられている。

俺を見て怯えなくなったのはいいのだが、キラキラした目で見てくる奴が増えていて、

少し鬱陶しく感じるのが最近の悩みだ。

そんなこんなで平和に暮らしていると、神奈子に呼び出された。

どうやら、全ての神が召集されたらしい。

…正直、嫌な予感しかしない。  
俺が神達に紹介された時の部屋へ行くと、もう他の神が集まっていた。

「これで全員揃ったな」

神奈子が真面目な顔をしている。  
周りの神も緊張感のある顔をしていて、空気が張り詰めている。  
そして、神奈子が重く口を開いた。

「最近狭間のおかげで村人からの信仰が増えてきた。  
一部の奴には話したと思うが、そろそろ実行に移そうと思う。  
…より多くの信仰を得るため、より多くの人々を救うため、  
他の地へ侵略し、その地の神から信仰を奪う」

他の地の信仰を得るために戦争を吹っかけるってわけか。  
随分大胆というか、物騒な方法考えたな。

「これはただの戦争ではない、信仰を得るための物。  
神と争うことはあっても、民を傷つける事は許されない。  
土地を荒らすようなことがあってはならない。信仰を得る得ない以前の問題になってしまう。  
純粹に神と神の戦争となる。付いて来られない者は残っても構わない」

誰一人として手を上げなかった。

「よし…ならばまずは近隣の地から始める。狭間と一部の神は残って神社を頼みたい」

「お前らだけで大丈夫なのか？」

「近隣の神社にはそれほど信仰の深い神はいない。私達だけで問題はないだろう」

「そうか…なら村人は任せとけ」

「ああ、頼んだぞ」

こうして神奈子は近隣の地への侵攻を始めた。

神社の守りを任された俺はぶっちゃけ暇だった。

神奈子達に何かあれば他の神が俺に連絡をよこす事になっている。

まあ、いい事だろう。順調に侵攻が進んでいると言う事なのだろうし。

三日ほど経つと、神奈子たちが帰ってきた。

神奈子と一部の神はぴんぴんしているが、怪我をしている神や、疲弊している神がほとんどだった。

「よお、お疲れさん」

「ああ、侵略は成功だ。かなりの信仰を得る事ができたよ」

その言葉の通り、神奈子達の神力は三日前とは比べ物にならなかった。

俺は神たちの怪我の処置をして、休ませた。

「神社のほうはどうだった？」

「何も問題なし、だな」

「そうか、流石は狭間だな」

と行って俺の横を通り過ぎ、神社に入ろうとした神奈子だったが、足がふらつき、そのまま倒れそうになったので慌てて腕で支える。

「おいおい、大丈夫か？」

「…すまない、戻ってきたら少し気が抜けてね…」

考えてみれば無理も無い。あれだけの神の軍勢を従え、他の神と戦ってきたのだ。

見た目では分からないが、ぼろぼろなのだろう。

「お前もゆつくり休め、無理をするな」

「すまないね、少し休ませてもらうよ…」

「え？いや、おい！そのまま寝るなよ！」

声を掛けるが既に遅く、すうすうと寝息をたてていた。

「…たく…しょうがないな」

狭間は神奈子の背中と膝の裏に手を回して担いだ。

所謂、お姫様抱っこである。周りに他の神がいれば大騒ぎになっていただろう。

そのまま神社の一室に運び、神奈子を寝かせた。

「こんな調子で大丈夫なのかね…」



心配で仕方ない狭間だった。

〈第十一話〉 信仰のために（後書き）

信仰のために侵攻…

狙ったつもりは無かったんだ…

2011/11/08

修正しました

〈第十二話〉 諏訪大戦（前書き）

累計PV10000、ユニーク1500アクセス突破しました！

ありがとうございますm)——( m

嬉しくて一話書いちゃいました。

これとは別に一万記念になんかやろうかと思えます。

何やるかはまだ全然決めてないけど…

〜第十二話〜 諏訪大戦

神奈子達の侵略は順調に進み、信仰もかなり増えてきた。だがそれと同時に問題も発生した。

俺が忙しくなった。当然といえば当然だ。

神奈子が支配する土地が増えるという事は、神社も土地も増え、信仰する人々が増える。当然、人々の願いも増え、その処理に俺が追われる。

支配した神社の神達の中に神奈子に従う奴も居たが、はつきり言ってその神達だけでは手が足りていない。

なのでそのフォーローを俺がしなければならぬ。

…ぶっちゃけ、超めんどくせえ。

ていうか人々の願いの中で、それぐらい手前らでやれよ！っていうのが混じって困る。

飼っていた猫が森に迷い込んだとかはまだいい、森は妖怪が出て危険だからな。

履いていた草履をなくしたとか知らねえよ！手前で探せこの阿呆！その辺のはつきり言ってくだらない願いは木つ端の神に任せている。神奈子も人々の願いを叶えるために動いているが、

また倒れられては困るので俺が引き止めている。

そしてある日、また神奈子から全員に召集がかかった。

「皆、今までよく戦ってくれた。次の土地が最後の土地、最後の戦争だ。

次に挑む神は今までの神とは段違いに強い。これまで通りに行くとは限らん。

今回は総力戦だ。よって今回は狭間にも来てもらいたい」

その言葉を聞いた周りの神がざわめき始めた。

狭間様までも…！？とか

それほどまでに強力なのか…とか

確かに、総力戦だな…とか。

…俺は皆にどう思われてるんだろう。なんでか俺まで様付けされてるし。

確かに最近神力が妖力と同じくらい多くなってきてるけど。

「今回はえらく弱気だな。何処の誰が相手なんだ？」

「次に攻めるのは諏訪の地、治めているのは洩矢諏訪子と呼ばれる  
いる神だ。

洩矢諏訪子自身は土着神であり、ミシャグジと呼ばれる祟り神を統  
括している神らしい」

「土着神に祟り神か…確かに厄介そうだな」

「だがその分得られる信仰は多い。明確な敵の戦力は分らんが、  
今までの戦いで私達もかなり強くなり、信仰も増えた」

確かに神奈子も周りの神も、最初あった頃とは段違いに神力が増え  
ている。

今、初めて会った時と同じように勝負をすれば、かなり苦戦を強い  
られるだろう。

それでも負けはしないし、尻尾を開放すれば一方的に勝てるだろう  
が。

だが確かに強くなっている。実戦の経験を積んだ事で神力だけでな  
く、

純粋に戦闘に関しての知識や勘なども鋭くなっている。

「確かに、今の皆ならよっぽどの相手でも無い限り負けはしないだろ

うな」

その言葉に神たちがさらにざわめき始めた。  
あの狭間様からお墨付きを頂けた…！とか  
これは勝てるんじゃないか？とか  
夢でも見てるようだ…！とか  
…だからお前らの中の俺はどうなってんだよ。

「そうだ！私達は強さを得た！恐れる事は何も無い！  
最後の戦を勝利で飾り、私達は信仰を得るのだ！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

戦意を高揚させ、俺達は洩矢諏訪子の治める諏訪の地へ向かった。  
諏訪の地で待ち構えていたのは、大量の巨大な蛇と、  
不思議な帽子を被った、小さな女の子だった。一瞬なぜあんな子供  
が？と思ったが  
あの女の子から神力を感じる。しかも女の子の神力はかなりでかい。  
神奈子といい勝負だろう。恐らくあいつが洩矢諏訪子だ。  
そして神奈子が口を開いた。

「諏訪の地を治める神、洩矢諏訪子よ！この地と信仰はこの大和の  
神、  
八坂神奈子が貰い受ける！」

「ふざけるなよ八坂神奈子！この地も信仰も我らのものだ！  
貴様ごときにくれてやるわけにはいかん！」

「天の力の前に這い蹲るがいい！」

「地の力の前にひれ伏すがいい！」

神奈子と諏訪子が神力を解放する。それに呼応し八坂の周りの神とミシャグジ達が咆哮する。数匹のミシャグジが神奈子に向かって突撃する。が、それを黙って見過ごす俺ではない。神奈子の周りに神力の結界を貼る。

「狭間、すまない」

「気にすんな、大将は大将同士で、下っ端は下っ端同士で戦うもんだろ？」

「ああ、諏訪子は私に任せてくれ。ミシャグジを頼めるかい？」

「任せとけ！」

そのまま結界から神力の衝撃波を作り出し、ミシャグジを吹き飛ばす。

神奈子はそのまま諏訪子に突撃し、二柱の戦いが始まった。ミシャグジは再び神奈子に突撃しようとするが、俺と周りの神がそれを許さない。

「おっと、木っ端の神は木っ端の神同士、仲良くしようぜ」

後ろから何処が木っ端だよ…という声が聞こえた気がしたが無視。思い切り殺気を叩きつけ、耳と尻尾を五本開放してミシャグジに突撃する。

殴り飛ばし、蹴り飛ばし、神力弾で撃ち落とし、刀で切り捨てる。討ちもらしたミシャグジも周りの神が戦っている。

左右から挟みこむようにミシャグジが突っ込んでくるが後ろに下が  
り、

そのまま刀を二本つくり、切り捨てる。俺を危険だと判断したのか、  
十匹ほどのミシャグジが俺を包囲しながら突っ込んでくる。

俺は神力弾で目の前の一匹を吹き飛ばし、包囲から脱出する。

そのまま後ろからミシャグジが追ってくるが、

固まっているところを太い神力のレーザーでまとめて倒す。

何柱かやられたようだが、戦況はこちらが優勢といえるだろう。

相手の動きを見る限り、実戦の経験は少ないようだ。

これなら問題なく勝てるだろう。

ミシャグジを切り捨てながら神奈子の方を見てみると、

大地を槍のような形に変えて戦っている諏訪子と、

空に形を持たせて諏訪子の攻撃をはじめ返している神奈子が見えた。

あちらも問題は無さそうだ。

数時間後、ミシャグジを全滅させたがこちらの被害も大きかった。

怪我をした神の治療をしながら二柱の戦いを見守っていた。

神奈子を手伝おうと思ったが、神奈子は一騎打ちで倒すつもりらしい。

なので俺は二柱の周りに结界を作り、周りの奴らが手出し出来ない  
ようにした。

「随分と余裕じゃないか八坂の。私程度なら一人で倒せるとでも言  
いたいのか？」

「ああ、お前程度の神を一人で倒せないようなら部下に顔向けでき  
ないからな」

「…言ってくれ！」

神奈子の御柱を避けながら諏訪子が叫ぶ。戦況はどうみても神奈子



が有利だ。

先程から諏訪子は防戦一方であり、このまま決着がつくかと思われた。

「舐めるなよ、八坂の…！」

諏訪子は何処からか鉄の輪を取り出し、それを自分の手で振るい、時に投げつけた。

「なっ！？」

鉄の輪の登場に戦況は一変した。なんと鉄の輪は御柱を切り裂いたのだ。

「なるほど、一筋縄では行かないか。だが、こちらも負けられないからねえ！」

神奈子が焦りだしたが、神奈子も何処からか蔓を取り出し、それをかざした。

すると諏訪子の持っていた鉄の輪はたちまち錆び付いてしまい、御柱を切り裂くどころか、はじき返されてしまった。

「くっ…！」

結局、そのまま神奈子の攻撃を避けきれず、諏訪子は敗れた。

こうして、後の世に諏訪大戦と呼ばれる神々の戦は、大和の軍勢の勝利で、幕を下ろした。

〈第十二話〉 諏訪大戦（後書き）

諏訪大戦勃発、そして終結。

ちなみに神奈子は日本全国を支配したわけではありません。海を越えていないので支配したのは本州だけです。

本編にこの情報を出すつもりは無いので、そーなのかー程度に思っておいてください。

一万PV記念 if story 永琳編(前書き)

（。。。。）おミ。えーりん！えーりん！

サブタイトルにある通りifの話であり、本編には関係ありません。

何がきつかけだったのかは覚えていない。

気付いたら彼を目で追う機会が増えていた。

どうせ変わった妖怪に対する興味本位での視線だろう。

以前、両親に医者もいいが学者や研究員にも向いているかもしれない、

と言われた。自覚は無いのだが、

どうも私は一度何か作業や趣味に走ると周りが見えなくなるらしい。新しい設備や薬など色々な開発を出来たのはその性分のせいでもあるかもしれない。

だから気にする必要も無いだろう、きつと彼を目で追ってしまうのもそのせい。

そう思っていた。それ以外に理由なんて浮かばなかったから。でも、どうやら違ったらしい。

以前、いつもの様に彼と薬草を取りに行ったら、

油断しきっていたらしい彼が恐竜の攻撃を受けていた。

そのとき、気付いたら怒りのままに恐竜を弓で撃ち抜いていた。

その有様は逆に彼から何かあったのかと心配されるほどだったらしい。

彼が受けた傷は軽傷。それどころか妖怪の治療能力のおかげで、恐竜を殺した頃には傷は塞がっていたらしい。

それぐらい分かっていたはずなのに自分を抑え切れなかった。

それからは彼を目で追う機会が増え、薬草を取りに行く際も、いつも以上に周囲を警戒し、二度とあんな事が起こらないよう細心の注意を払っていた。

彼に何も起こらないようにいつも以上に彼を近くに置いた。

自分でもこの行動の意味が分からなかった。

普通逆だろう、彼は私の護衛として来ているのだから。

彼が私を守るのなら理解できる。だが実際は私が彼を守っている。そんな必要が無いほど彼が強いことも理解している。にもかかわらずに、

彼に傍に居てほしい、遠くに行かないでほしいと思うようになっていた。

きつと気を抜いて自然体のまま話せる相手が両親以外には彼しか居なかったから、

彼に友情を感じていたんだと考えた。

だから彼に死んでほしくない、もっと傍にいたいと思うようになったのだらう。

だが、それが友情ではなく恋愛感情、恋心であることに気付いた。いや、気付かされたというべきだらうか。

先日、いつもの様に薬草を集め終わり、街に戻ってきた日の事だ。

「あ、狭間さん！」

「ん、ああ、この間の…」

「はい、以前は本当にありがとうございました」

「気にすんな、弟君の調子はどうだ？」

「おかげさまで、もうかなり回復しました」

「そっかそっか、そりゃ良かった」

突如若い女性が彼に声を掛けたのだ。しかもかなり親しい様子で。

その後も世間話を繰り広げている。私を放っておいて。イラっときた。かなりイラっときた。

放っておかれた事に対してではなく、親しげに話している女性に対

してだ。

気付いたら彼の手を握り締め、

「ほら、狭間。さっさと帰るわよ」

「え、いやでも話の途中…」

「いいから早くしなさい」

「は、はい。わ、悪い、それじゃあな」

「は、はい…」

彼を半ば引きずるようにしながら帰路に着いた。

途中、彼が俺なんかした？と聞いてきていた様だが、耳に入っていなかった。

あの女が離れてしばらく歩いた後、手を握っている事で頭がいつぱいだった。

自分の鼓動がうるさくて、顔が熱い。おそらく鏡を見たら、真っ赤な顔をした自分と対面する事になるだろう。

そんな顔を彼に見せるわけにはいかない。

それより、何故あんな強引に話を終わらせるために割り込んだのか、なぜそのために手を繋ぐという方法をとったのか、

自分でも分からなくて、無言で考え込んでしまっていた。気付いたら家に着いていて、家の中に入った後、

「じゃあ、今日の仕事はこれで終わりよ」

そう彼に告げた後急いで自分の部屋に戻って、ベッドに倒れこんだ。

「なんであんなことしちゃったんだろう…」

呟いた後、強引に話を終わらせた事に対する罪悪感に苛まれた。後で聞いた話だが、あの女性と親しかったのは彼女の弟が、警備の目をすり抜けて街の外へ出てしまったらしい。

それに気付いた彼女は、警備の止める声も聞かずに外へ飛び出してしまった。

その話を警備から聞いた彼が彼女達を探しに行き、恐竜に襲われていた所を助けたいらしい。

弟は恐竜の爪の攻撃を受けて重傷だったらしいが、彼が二人を急いで街に運び、

弟を病院に搬送した。弟は入院する事になったが命に別状は無いとか。

ただそれだけの事があっただけ。それで彼と親しげに話していただけ。

なのに、腹立たしかった。いつも私に見せてくれる笑顔を彼女に向けていた。

その光景を思い出して、悲しいような腹立たしいような複雑な気持ちになった。

あの笑顔を私だけに向けてほしい、私だけを見てほしい、そう思った。

「ああ、そっか…」

そして気付いた。

「私は、彼の事が好きなんだ…」

呟いて、自分の顔が熱くなる。彼と手を繋いだ光景を思い出してしまい、

更に顔が熱くなる。彼の手の感触、硬くてごつごつしていた。でも、とても大きくて暖かくて、恥ずかしかつたけど安心した。やっぱり、私は彼を愛している。はっきりとそう言える。

「ふふっ…」

つい数ヶ月前に会ったばかりなのに。

人の心は私の頭でも分からない。でもそれでもいい。

このなんともいえない高揚感というか、心地よさを味わえたから。

この感覚を長く味わっていたい。そのためには彼の心を射止めなければ。

「さあ、覚悟して頂戴、狭間。

私は欲しいものは必ず手に入れないと気が済まないの」

どうすれば彼の心を射止める事が出来るだろうか、

私の勘だが、彼はきつと恋愛感情には鈍いと思う。

射止めるのは苦労しそうだ。そんな所も良いと思える辺り自分ももう手遅れだな、

と笑った。さあ、そうと決まれば明日から早速行動しなければ…

誰にも渡さない、そう決意して彼女は目を閉じ、眠りについた。



一万PV記念 if story 永琳編(後書き)

何かちょっとヤンデレっぽくなっちゃった…

〈第十三話〉 守矢神社の誕生（前書き）

諏訪大戦終結後のお話

〈第十三話〉 守矢神社の誕生

神奈子の勝利を見届けた大和の神達は一斉に歓声を上げた。

怪我をして倒れている神達は安堵し、立っている者は腕を突き上げ、勝利を喜び、神奈子がそれに応えていた。

しばらく経って、諏訪子が意識を取り戻した。

「私の負け……か……」

「ああ、諏訪の地と信仰は私達大和の神が貰い受ける」

「分かった、敗者は大人しく従うよ」

こうして諏訪の地を手に入れた神奈子。

だが手に入れたの”諏訪の地”であり、信仰は手に入らなかった。

なぜなら諏訪の地の人間は今まで信仰していたのは崇り神であるミシャゲジと、

それを束ねる土着神の諏訪子だ。

いくら諏訪子達が敗れたからといって他の地からやってきた神を信仰などしたら、

ミシャゲジ様の怒りに触れて私達は祟られてしまう、信仰を変えようとはしなかった。

これには俺も神奈子も他の神も頭を悩ませた。

今まで似たような事が無かったわけではないが、

それでも信仰している神が敗北したと知った時、人々は信仰を神奈子に向けてくれた。

だが今回は簡単に行きそうにない。祟りという畏れは人々に深く根付いている。

ここから神奈子を信仰させるにはどうしたものか、と悩んでいた。

そして、その解決案を提案したのは意外にも洩矢諏訪子であった。

「難しい話じゃないよ。信仰の流れをごまかせばいけるでしょ。」

「流れをごまかす…？ってどうやって？」

「神社への信仰はその神社の持ち主の神への信仰。

つまり、表面上は私の神社と思わせて実際は神奈子の物にすればいい。」

「なるほど…なら、神社の名前を変えなければならぬな。」

「そんな事したら人間にばれるんじゃないか？」

「なら、字を変えるだけでいいよ。洩の字を守り変えて、

これからはこの神社は守矢神社と名前を変えればいい。」

「しかし諏訪子、何故この案を私達に？」

黙っていればこのまま神社を乗っ取られずに済んだかもしれないのに。」

「私は敗者だからね…勝者に従うさ。」

それにあんたなら任せても大丈夫だと思っただから。」

諏訪の地の人々は諏訪子を信仰しているので諏訪子にも信仰が流れているが、

神社へ伝えられた感謝の念から出来た信仰心は神奈子へ流れるため、信仰の大半は神奈子へ流れるようになっていく。

狙い通り表面上は諏訪子、実際は神奈子へ信仰が流れるという形が出来上がった。

こうして守矢神社が誕生した。

「……ところで、ずっと気になってたんだけどあんたは何者なの？」

「俺か？俺は狭間妖人っていうんだ。永生きな妖怪だよ」

「狭間の場合、誤字とは言えないねえ……」

「どんだけ生きてるのさ……」

「歳は数えてないからわかんねえけど、俺が生まれた時に周りに居たのは人間じゃなくて恐竜だったな」

「……………」

「……そのうえ結構信仰集めてるから、今や半神半妖と言ってもおかしくないし、かなり規格外だからねえ……深く考えないほうがいいよ、諏訪子」

「……うん、そうする……」

……何か納得いかないが、まあいいか。

この諏訪大戦を最後に神奈子の信仰を求めた戦争は終わった。

……のはいいのだが、諏訪大戦は今までの戦いより遥かに多く負傷者が出てしまった。

神奈子も諏訪子も負傷しており、しばらくの間身体を休める事になった。

その間は当然神の仕事、人々の願いを聞き入れることは出来ない。その穴埋めをするのが、軽傷で済んだ神と

「俺、なんだよな…」

…なんだろう、最近の皆は俺の事を便利屋か何かかと思ってないか？  
まあ今回は本気でほぼ全員が動けない状態だったんだけど。  
なので、大戦が終結してからしばらくの間は超忙しかった。

基本的に俺がやっていた仕事は人の願いを聞いてそれをこなす、  
だけだったのだが、神奈子も諏訪子も休んでいるので、  
各地の願いをまとめて分類し、木っ端の神々に分担させてこなさせる、

という面倒な仕事まで俺がやる事になった。

もちろん俺一人だけじゃなくて他の神も手伝ってくれたけどね。

神奈子も諏訪子も苦労してたんだなあ…と改めて神の苦労が分かった気がする。

人形もフル活用したんだが、それでもとんでもなく忙しかった。

神の仕事をこなして、怪我をした神の様子を見に行き、時折治療を  
施して、

神奈子と諏訪子の様子も見に行つて、他の神社にも寄つて願いを聞  
いて…

こうやって思い返してみると、よく倒れなかったな俺…

あ、そうそう、諏訪大戦の時に尻尾と耳を開放して戦っていたんだ  
が、

それを見ていた人間がいたらしい。俺の信仰無くなるかよりも、  
これが原因で神奈子や諏訪子への信仰に影響でたらまずいな、  
と思つたが特に信仰に問題は無かつた。

それどころかどうやら俺は武神とか黒狼神とか呼ばれてるらしく、  
信仰する人々が増えているんだとか。ちなみに諏訪大戦の時に、  
尻尾を開放して妖力を出すのはまずいかと思つて、

神力で尻尾を生成出来るかぶっつけ本番で試したんだが、成功して  
いた。

その時は五尾出していたが、その時点では神力で生成するのは七尾

が限界だった。

でも今は信仰が増えたからか、神力でも十尾生成して余るほどになっている。

神奈子にいつそあなたの神社も建てるかい？って言われたけど断った。

神奈子の手伝いしてたら神力が増えただけで、

神様になりたかったわけじゃないからな。でもそのおかげで助かったのが、

人に願いを聞いてもしようもない願いを言う人間がいなくなっていた。

なんでも俺にそんな下らない願いをするなんて失礼だからなのだからか。

俺は少し楽になったが、当然そのしようもない願いは他の神がやることになった。

他の神に恨めしそうな眼で見られた。その分妖怪退治とかの仕事が増えたから、

実は仕事の量はあるまり変わってないんだけど。

…早く神奈子や諏訪子復帰してくれないかな…

〈第十三話〉 守矢神社の誕生（後書き）

便利屋狭間

神社への信仰＝持ち主への信仰

つていう話は独自設定です



〜第十四話〜 別れの宴（前書き）

今回はギャグ回です

第十四話 別れの宴

諏訪大戦終結から数カ月が経った。

負傷していた神の治療も完了し、神奈子も諏訪子も復歸していた。

俺の仕事も落ち着き、暇な時間が増えてきていた。

そこで前々から考えていた事を二柱に告げる。

「なあ、神奈子、諏訪子」

「ん？」

「なーに？」

「そろそろここを出て旅に出ようと思う」

「「へ？」」

そう、考えていた事とは守矢神社を去る事だ。

「な、なんで？」

「結構長い間ここに居たからな…外に出て色々な物を見て回りたいんだよ」

「でも、神としての仕事は？」

「もう諏訪大戦で負傷していた神も復歸したんだ。俺が居なくても平気なのは分かってるだろう？」

「あーうー…それはそうだけど…」

「第一、俺は元々神奈子の手伝いをしていただけで神になるつもりは無かったんだよ」

「…そうかい、そういわれちゃ仕方ないね」

「いいの？神奈子」

「ああ、随分長い間引き止めてたからねえ、もういいだろう。それに、だめって言ったところで止める気は無いんだろう？」

「まあな」

「ほらね。それとも力づくで止めてみるかい？」

「…やめとく」

「いつここを出るんだい？」

「明日の朝くらいにかな」

「そうか…よし！なら今夜は狭間の旅立ちを祝って宴だ！」

「へ？いや、別に…」

「おー！そうしようそうしよう！」

「いや、だから別に…」

いいんだけど、という制止の言葉も聴かずに二柱は宴会の準備を始めた。

神奈子は他の神を呼びに、諏訪子は料理を作る、と言っていたが…  
諏訪子が料理しているところなんて見た事無いが、大丈夫なんだろうか。

なんか、危なっかしい画しか浮かばないんだが…

「…ねえ狭間、何か失礼な事考えてなかった？」

「……………ソナコトハナイデスヨ？」

「あーうー！絶対考えてた！見てろ！

私の事を崇めたくなる位美味しい料理を作ってやる！」

そう言っただけで台所に走って行ってしまった。しかし、神様が料理を作るって初耳だな…

どんな料理が出るのか、せめて食べるものがありますように…  
って祈ってたら何処からか包丁が飛んできた…ってあぶねっ。  
しまった、ここで祈ったらそりゃ諏訪子に聴こえるよな。

「……………狭間様あゝ！！！！」

「……………っ！うるせえ！いきなりでかい声出すな馬鹿共！！」

「……………す、すみません…」

いきなり木っ端の神×5が障子をスパーンと開けて俺の名前を叫んだ。

例のキラキラした目で見てくる奴らだ。  
そいつらが口々に叫んでいる。

神奈子様が仰った事は本当なのですか！？とか  
何故いきなり旅など！？とか

まさか、我々に愛想を尽かしたので！？とか。

ああ、こいつら神奈子に呼ばれてきたのか、旅に出るのは俺の勝手  
だろう。

そして最後の奴、声の音量を下げねえと本当に愛想尽かすぞ。

だが俺の言葉も聞かずギヤーギヤー騒いでいる。

あまりにも鬱陶しいので一発ずつ殴って気絶させておいた。

その後お茶を飲みながら待っていると、続々と他の神も集まってきた。  
た。

もちろん、その中にもキラキラした目で見てくる奴も居る。

最初の奴らみたいに鬱陶しい奴らも居たので例外なく鉄拳制裁で沈  
んでもらった。

そして夜になり神奈子も戻ってきて、大部屋に大量の料理が運び込  
まれていた。

「それじゃあ、乾杯の音頭は私と狭間でやろう。」

神奈子が呼ばれ、俺も皆の前に立たされる。

「さて、皆に話した通り、明日の朝に狭間は旅に出る。

長い間私の我儘でここに縛り付けるような真似してしまったからね  
でも、別れなんて寂しい事は言わずに狭間の旅立ちを祝おう。」

「あー…、まあ旅に出ると言っても、またひょっこり戻ってくるか  
もしれないし、

気楽に考えていてくれ。俺達は寿命なんてあって無い様なもんだし  
な」

「気の抜ける言葉だねえ…まあ狭間らしいか。

よっし、それじゃあ狭間の門出を祝って！」

「乾杯！」

「くくくくくくかんぱあーい！！」「」「」「」

そこからはもう、てんやわんやの大騒ぎだった。

色んな神に酌をしたりされたり、神奈子に無理やり飲まされたり、残って欲しいと泣き出す奴も居れば、居なくなっただけでせいせいする、とか言ってる奴も居た。そいつは神奈子に御柱落とされてたけど。しかし、これだけ皆集まって送り出してくれるのは素直に嬉しいな。恥ずかしいから口には出さないけどな。そして、心配していたが並べられている料理はかなり美味かった。

「諏訪子の奴、料理できたんだな……」

「うん？その料理を作ったのはうちの神社の巫女だよ？」

「へ？じゃあ諏訪子は？」

「そういえば見当たらないね……まだ料理を作ってるんじゃない？」

「時間かかり過ぎじゃ「おまたせえー！」……噂をすれば、だな」

「時間かかっちゃってごめんごめん、やっと完成したよ」

またもやスパーンと障子が開けられ、そこには皿を持った諏訪子が居た。

そしてその諏訪子の持っている皿の上には謎の黒い物体が鎮座していた。

異臭を放ち、ときおり蠢いているようにも見える。

…まさか、それが料理か？違うよな？頼むから違つとってくれ。

「諏訪子…その皿の上に乗ってるそれは…？」

「諏訪子特製料理だよ！さあさあ狭間、さつそく食べてもらつてよ！」

堂々と料理と言い張つたよこの神様…

これを…食えと…？この食つたら三日は寝込むであるつ暗黒物質を…？

はつきり言おう、冗談じゃねえ。

どうにかして回避せねば…！

「あー、いや、俺は結構料理食つたせいで腹一杯でな…神奈子は？」

「うええっ！？い、いやあ、私も結構食べたから…」

「他の奴らは？」

「「「「「「お腹一杯です！」「」「」「」」」」」

こんな時だけ一致団結しやがつて…！

「ほらほら狭間、あーんしてあーん」

「ちよっ！待て！やめろ！その暗黒物質を俺に近づけるな！」

全力でその場からエスケープ、しようとしたのだが、

「ほらほら狭間、せっかく諏訪子が作ってくれたんだから、残すのは失礼だよねえ？」

後ろからがつちり神奈子に羽交い絞めにされた。他の神もよってたかつて俺を押さえ込んでいる。

「なっ！てめえら謀ったなあ！」

「はい、あーん」

「ちよっ、まじ、やめ…、ぎゃああああああああ！…！」

この日から諏訪子は料理を禁止された。（諏訪子は最後まで文句を言っていたが）

諏訪子には悪いが、正直ホツとした。もう、諏訪子の料理は二度と食いたくねえ…



く第十四話く 別れの宴（後書き）

無理があるように見えるかもしれないが…  
どうしても諏訪子にあーうーって言わせなかったんだ！

〈第十五話〉 あてのない旅へ（前書き）

今回ちょっと短くなっちゃった

〈第十五話〉 あてのない旅へ

「死屍累々とは、まさにこの事だな……」

狭間の目の前には大量の神が倒れていた。

何故こんな事になっているか説明すると、諏訪子の料理もどきが原因だ。

あの後無理やり料理もどきを食わされそうになった狭間は、能力で料理もどきを消し去ったのだ。

それを見て諏訪子が怒り出した。せつかく作った料理をー！と。こっちとしては冗談ではなく命の危機を感じたので、

あんなもん食えるかっ！と口に運ばれる料理もどきを次々に消していった。

そうしていると諏訪子は、渋々狭間に食べさせるのを諦めた。

そう、”狭間には”

諏訪子は狭間に食べさせる事は諦めたが、その矛先は他の神に向いていた。

他の神々は一気に怯えた表情になり、一斉に逃げ出した。

そういえば神奈子の姿が見当たらないが、先に逃げたんだろう。

しかし、ミシヤグジと諏訪子が協力して逃げ出した神を捕まえた。

実は俺もちゃっかり協力している。あの料理もどきを食うのはごめんだからな。

そこからはまさに地獄絵図だった。

意を決して諏訪子の料理もどきを食い、泡を吹きながら倒れた者。

最後まで抵抗を続けたが、結局は諏訪子に食わされ青ざめた顔で動かなくなつた者。

俺に助けを求めたが見捨てられ、

発狂しかけたが諏訪子に無理やり食わされて再起不能になった者。

一応料理もどきは大勢の神を犠牲に完食。諏訪子は満足気だった。

その後諏訪子は逃げた神奈子を連れ戻してくる、と外に出て行った。俺はその間に倒れている神を他の部屋に運んで寝かせたり、食器を巫女さんと一緒に片付けたりしていた。皿の汚れを能力で消し去ったから、

食器をなおすだけで済んだから大して苦ではなかったけど。

そうしていると、諏訪子とびくびくした様子の神奈子が戻ってきた。

「あ、おかえり」

「ただいま」

「もう料理は残ってないよね…？」

「ああ…多大な犠牲を払ったがな…」

「そっか」

「…酷くない？」

「いや、あれを料理と呼んだら料理に失礼だね」

「確かにね…食ってないけど、まず臭いがおかしかった。食い物の臭いじゃなかったよあれは」

「あーうー…」

「さて、もう皆眠っちゃったし、そろそろお開きにしようかねえ」

「そっだな、俺達も寝るか…」

その後各自の部屋に行きそのまま眠りについた。  
そして翌朝…

布団から出て身体を伸ばしながら障子を開ける。  
外は雲一つ無い快晴だった。

「ん〜っ…いい天気だ」

部屋を出ていつも朝食を食べている部屋に向かう。  
部屋には既に諏訪子と神奈子が居て、朝食が準備されていた。

「おはよう、狭間」

「遅いよ〜狭間！」

「悪い悪い、待たせちゃったな」

「よし、じゃあ狭間も来たし…」

「…いただきます」

朝食を食べながら諏訪子がぶつぶつ言っていた。  
どうすればこの味に…とか聞こえたので、料理を諦めてないらしい。  
もしまた諏訪子が料理を作ろうとしたら全力で止めるがな。

「狭間、食べ終わったら行くのかい？」

「ああ、そのつもりだけど…どうかしたのか？」

「いや、実は昨日の宴で倒れた神がまだ起きて無くてね…  
別れの挨拶くらいしたいだろう」

「湿っぽいのは嫌いだからいいよ」

「さっぱりしてるねえ……」

そんな会話をしながら朝食を終えて、神社の外で別れを告げる。

「それじゃあ、元気でな」

「ああ、心配はいらないだろうからねえ」

「確かに狭間は死ぬどころか怪我する場面も想像出来ないし……」

「……まあ、信頼されてると思っておくよ。

寝てる神が起きたらよろしく言っといってくれ」

「ああ、それじゃあな」

「ばいばいーい！」

「それじゃあな」

手を振りながら歩いて山を下りて行く。

さて、まずは何処へ向かおうかな……

く第十五話く あてのない旅へ（後書き）

ようやっと守矢神社のお話が終わり

何か神奈子がお母さんみた（ピチユーン

〜第十六話〜 天の狗（前書き）

今回オリキャラが出ます



第十六話 天の狗

山を下りて方角も分からないが歩いて行く。

時折頬を撫でる風は心地良く、燦々と降り注ぐ陽の光は眠気を誘う。風が撫でるのは頬だけではなく足元に広がる草や木の葉も撫でて過ぎ去り、

サワサワと綺麗な音を鳴らし、心を癒してくれる。

「ん〜、本当に良い天気だ…」

両手の指を組んで上へぐーっと伸ばし、尻尾もぴーンと上へ伸ばす。耳と尻尾は今は妖力で生やしている。周りに人も居ないし隠す必要も無いが、  
と思ったためである。といっても、十尾は邪魔なので一本しか生えていないが。

「さて、結構な距離を歩いてきたと思うんだが…ここはどこなんだろうなあ…」

本当に何も考えず、何の当ても無く歩いてきたので当然だが、自分が居る場所が何処なのか把握していない。

旅に出たはいいが、このまま誰にも会わないのはつまらないな、とそろそろ目的を決めようかと考え始めたところ、

少し遠くにある山から妖力がこちらに向かってきてきているのを感じた。どンドン近づいてくるそれは狭間の近くまで来ると唐突に声を張り上げた。

「そこの貴様！ここがどこだかわかっているのか！」

「いや、知らないが…なんだ？有名な観光名所か何かなのか？」

「そんな訳があるか！」

「じゃあ、逆に何にも無いとか？」

「違う！貴様…ふざけているのか！」

「ええ…じゃあ何なんだよ…」

「こ、この…ここは妖怪の山！我々誇り高き天狗の地だ！

貴様のような雑魚妖怪が軽々と足を踏み入れていい土地ではない！」

誇り高き…ねえ、確かにいきなり相手の事を雑魚妖怪呼ばわりする  
辺り、

頭が固くてプライドが高そうだなあ。いきなり面倒くさい奴に会っ  
たな。

話し合いは難しそうだし、ここは大人しく退散しますかね…

「わーったよ、すぐに出て行きますって」

「貴様、なんだその態度は？我々を愚弄しているのか！」

「別にそんなつもりは無いんだが…」

「本来ならば今ここで首を飛ばしているんだぞ！

いい加減そのふざけた態度を改めたらどうなんだ！」

うわぁ…何こいつめんどくせえ…

「き、貴様あつ！」

「あつ、やべ、声に出てた」

「許さん！貴様はこのまま連行し、泣き叫び命乞いをするまで地獄を見せたの後、

最も凄惨な方法であの世に送ってやる！」

と叫んだと思つたら俺の後ろに即座に回りこみ、

肩を掴み、そのまま飛び立った。

死刑は嫌だがこいつらの親玉がどんなやつかは興味があるな。

プライドの高い奴を統率するのって中々難しいだろうし、

天狗の社会ってのはどうなってるのか知りたい。

大人しく捕まつてるフリをしながらこいつに運んでもらうか。

「あーれーころされるー」

「……ふん、いつまでそんな態度で居られるかな」

しっかし天狗ってのは速ええな、もう山の頂上近くまで上って来ちゃまった。

「ほら、とつとと歩け！」

山頂のでかい建物の前に来ると乱暴に地面に落とされた。

くるつと空中で一回転して着地すると天狗の目が余計鋭くなった。

着地すら許されねえのかよ…誇り高き天狗（笑）だな。

中に入ると俺を運んできた天狗より一回りでかい天狗が何人か居た。その内の一人が低い声で喋りだした。

「そやつは何者だ？」

「はっ、先程妖怪の山に侵入し、あろう事か我々天狗を愚弄した雑魚妖怪です」

「ほっ…」

ビキツという音が聞こえ、でかい天狗の額に青筋が浮かんだ。  
おお、こええこええ…

そこから他の天狗が口々に今すぐ死刑にすべきだ！やらいや、地獄を味あわせてからだろう。やら言い争いを始めた。すると奥の方から一際でかい妖力がこっちに向かってくる。

「何事だ、騒々しい」

「…天魔さま！」「…」

騒いでいた天狗たちが一斉に跪き、頭を下げる。出てきた天狗は見るからに偉そう。

髪は黒で中性的なイケメンだ。それに、  
なんというか…威圧感というか、妖力じゃなくて何かオーラみたいなのを感じるな。

天魔って言ってたか…恐らくこいつが親玉で間違いないだろう。

「巡回の天狗が我々に無礼を働いた妖怪を捕らえてきたと」

「それが、この妖怪か」

「はっ」

「その妖怪、名を何と言つ？」

「相手に名前を訪ねる時は自分から名乗るのが礼儀つてもんだらう？」

「貴様！天魔様に向かつて無礼な！」

「面白い事を言つな。我々がお前のような底辺の妖怪に礼儀を持って接するとても？」

なんだ、こいつもプライドが高いだけか……  
もつと面白い奴かと思つたんだが、期待はずれだったな。

初対面の相手に礼儀もなしに見下した態度とは、仲良くなれそうに無いな。

「そうかい、そんじゃ俺はもう用は済んだから帰らせてもらつよ」

「ほう、このまま帰れるとても？」

「思つてなきや言わないさ」

すると天魔が俺の首に向かつて手刀を入れようとしてきたのでその手を掴んで止める。

「なっ……!？」

「そこらの妖怪と比べれば速いけど、俺からすれば遅いな」

驚いた顔をした天魔をそのまま背負い投げの要領で投げ飛ばす。

周りの天狗は慌てて天魔を受け止める。

「天魔様！」

「ご無事ですか!？」

「くっ…おのれ、調子に「調子に乗ってるのはお前らの方だろう」  
っ!？」

尻尾を五本開放し、殺気を叩きつけて威嚇する。

周りの天狗はその姿を見て腰を抜かしてガタガタと震えだし、  
天魔も冷や汗を掻いていた。

「何だ、この妖力は…!？」

「そついや名前を聞かれてたな、俺は狭間妖人ってんだ」

「狭間妖人…!？まさか、お前があの黒狼神か？」

「ああ、そついやそう呼ばれているらしいな」

「…なるほど」

ただのプライドの高い馬鹿かと思ったが…それでも無かったか。  
周りの天狗と違って少しずつだが落ち着きを取り戻し始めている。  
冷静に現状を判断し、たとえ危機的状況であっても周りの奴に焦り  
を気取られないのは  
組織を統率する者なら必要な能力だ。

「どつやら無礼を働いていたのはこちらだった様だな。」

黒狼神様、どうか無知な我々をお許し頂きたい」

「別に構わないさ。天狗がどんな奴なのか興味があったしな」

「寛大な心に感謝致します」

「……別にそんな畏まった喋り方じゃなくていいぞ。呼び方も狭間でいい」

「ですが……」

「じゃあ、命令だ。その口調をやめる気色悪い」

「……分かった、ならばそうさせてもらおう」

「うん、その方がいいな」

「狭間殿、もし良ければ少し話がしたい。構わないか？」

「ああ、いいぜ」

「感謝する、では私の部屋へ来てくれ。そしてお前達、いつまで呆けているつもりだ？」

天魔が周りの腰を抜かした天狗達に少し低い声を掛ける。  
天狗達はハツとしてすぐに立ち上がり、

「……も、申し訳ありません！」「」「」

と言った後すぐにまた跪いた。

「まあよい、自分の持ち場に戻れ、狭間殿と話している間誰も部屋に入れるな」

「「「はっ！！」「」「」

「では狭間殿、ついて来てくれ」

「ああ」

天魔に部屋へと案内してもらった。

…途中天狗に怯えた目で見られたが気にしないでおう。



↳第十六話↳ 天の狗（後書き）

次回は天魔の話

〈第十七話〉 統率者（前書き）

時代のせいで会話に英語使えなくて困る…

〈第十七話〉 統率者

「すまない、少し散らかっているが気にしないでくれ」

案内された部屋には簡素な机と椅子、布団が畳んで置いてある。辺りに少し紙が散らばっているが大して気にならない程度だ。

「そんなに散らかってないと思うぞ？」

「そう言ってもらえると助かる、整理整頓は少し苦手だね。

さて、早速本題なのだが狭間殿は何故この妖怪の山に？」

「いや、特に用事があつた訳じゃないんだ。ただぶらぶらと旅に出て、

そしたらあの見回りの天狗に見つかつて連れてこられたんだよ」

「旅…？狭間殿は神ではないのか？」

「厳密に言えば違う。俺は元々妖怪だから半神半妖つてやつだ。

神奈子の手伝いをしてたら神力が増えて、気付いたら神と呼ばれてただけ」

「黒狼神の名は良く聞いたが、

何故か神社が無いと聞いて不思議だったのだがそういうことだったか…

その上、八坂神奈子の名が出てくるとは驚いたな…

しかし先程”用は済んだ”と言っていなかったか？」

「ああ、捕まっても逃げようと思えば逃げられたんだが、

誇り高い天狗を纏めている奴、つまりお前がどんな奴なのか見てみたいと思つてな。

「一目見れたから”用は済んだ”つて訳だ」

「なるほど、そういうことだったか…」

「しかしさつきから気になっていたんだが、なんというか暗いというか、

悩んでいるというか…お前なんか落ち込んでいないか？」

「む、失礼。気を遣わせるつもりは無かったのだが顔に出ていたか…」

「いや、構わないんだけどさ。なんかあったのか？」

「いや…気を悪くしないで欲しいのだが、先程部下に無様な姿を見せてしまったのが、

その、少し引つかかっている…」

「あー…、その、悪かった。誇りを汚すような真似をしてしまったな」

「いや、原因は私が弱いからだ。挟間殿が気にする事ではない。

それに誇りを汚すというのもあるが、

ただでさえ女である事でなめられる事もある上、先程の失態は…、部下への信用にもかかわるのでな…」

「…すまん、ちと軽率過ぎる行動だったな」

そりゃそうだ、あんな見るからに天狗の幹部が揃っている場面で親

玉が負けたのだ。

それもあつさりと。周りの奴も手を出す事すらできなかつたが、それは天魔にも言えることだ。確かに部下が自分の上司の強さを疑うのも無理は無い。

……ん、ってちよつと待て。

「さつき、なんて言った？」

「む？部下への信用にかかわる、と言つたが」

「いや、そのもうちよつと前」

「……？ただでさえ女である事でなめられる事も「そこだよ！」な、なんだ？」

「お前、女だつたの!？」

「あ、ああ、そつだ。普段は女である事を隠すようにしているがな。挟間殿を騙せたのなら私の演技もそう捨てたものではないかも知れんな」

……びつくりした。ずっと男だと思つてた……

確かに中性的な顔をしてるから顔だけ見れば女にも見える。

男と思つたのは、女性にしては声が低いし、服装がどう見ても男物だし、

なにより胸が……

「挟間殿、今何か失礼な事を考えなかつたか？」

「い、いやあ、なんだもないですよ？」

「盛大に噛んでいるぞ挟間殿…」

こええ…天魔の眼光がとんでもなくこええ…

子供が泣き出すくらい怖い顔してるよ…

「…まあ、女である事を隠すならこの方が都合がいいのだが」

やっぱりさらっと心読まれてた…

なんだこいつ、能力でも持ってたのか？

「ま、まあそれはいいとして、女である事を隠してるって言ったよな？

じゃあ、さつき集まってた奴らはお前が女って事を知らないのか？」

「あの場に居た天狗達は私が女である事を知っている。

挟間殿を連れてきたあの天狗は知らないがな」

「って事はあの幹部達に、

お前が天狗の頂点である事に疑問を抱かれるかもしれない？」

「恐らくは」

それは…参ったな、いきなり来てこれだけ盛大に迷惑をかけて自分は満足したからハイ、さようならって訳にはいかないよな…

「なあ、天魔、さつきのお前って全力だったか？」

「む？いや、全力ではない」

「よし、それじゃあ…」

百聞は一見に如かず、耳で聞くより目で見た方が早いし正確だ。

「天魔、俺と闘おう」

「……は？な、何故？」

「全力のお前さんを見てみたいってのもあるけどな。全力で戦っているところを部下に見せた事はあるか？」

「いや、まだ全力を出すほど強い相手に会った事は無かったからな」

「なら好都合だ、これはお前の力を誇示して信用を勝ち取る絶好の機会だ」

「…なるほど、だがいいのか？」

「何がだ？」

「その、こちらの勝手な事情に巻き込んでしまっ…」

「今回の件は俺が原因だからな、俺が解決するさ。」

「そうか、気を遣わせてしまっすまない」

「いや、こちらこそ余計な事をしてしまったからな」

「そう言ってもらえると助かる、では外に出てくれ」

「おう、遠慮は要らないから全力でかかってこいよ」

「ふふっ…そうさせてもらおう」

俺と天魔は外に出て、空に飛び上がった。

周りの天狗が何事かと集まってくる。

「天魔様！」

「これは一体…!?!」

「挟間殿が私に稽古をつけて下さるらしい。

お前達も目に焼き付けておけ、滅多に見られるものではないぞ」

すると周りの天狗がなんと、一大事だ!と騒ぎ出し、他の天狗を呼びに行った。

数分待ち、周りが天狗だらけになった。

ざわざわと声が聞こえる。その中に天魔様は本当に強いのか?という声も聞こえた。

周りの天狗に怒られていたが、やはり天魔の強さは少し疑われているらしい。

「そろそろいいか？」

「ああ、粗方集まったようだ。こちらはいつでも始められる」

「よし、そんじゃ始めますかね、その天狗、合図を頼む」

「へっ!?!は、はひっ!」



びくびくしながら一匹の天狗が出てくる。  
まあ、この状況じゃ緊張するよな。

「そ、それでは、始めっ！」

「では全力で参るぞ、挟間殿」

「天狗の頂点の力、見せてもらっぜ」

こうして天魔と狭間の稽古という名の戦いが始まった。

〈第十七話〉 統率者（後書き）

実は天魔は女だったのさ！

ナ、ナンダッテ！

く第十八話く 天の狗の頂点 対 黒き狼の神（前書き）

天魔と狭間のバトル

〈第十八話〉 天の狗の頂点 対 黒き狼の神

天魔が正面から手刀を繰り出してくる

(さっきと同じ?)

そう思った瞬間、天魔が視界から消える。

「ふっ！」

「っ!?!」

後ろから蹴りを入れられた。

さっきよりかなり速いな、影しか見えなかった。

「まだまだ!」

「ちっ！」

スピードで錯乱する気なのか俺の周りを飛び回りながら時折攻撃を加えてくる。

初っ端から全速力か?なにせよ面倒だな。

「だが、まだまだ」

尻尾を三本まで開放し、避ける事に専念する。

攻撃する瞬間は少しだけだが殺気が強くなる。それを目印にすれば…

「…くっ」

「当たるかよ！」

四方八方から飛んでくる手刀や拳、蹴りを次々避ける。  
よし、目も慣れてきたぞ…

「ふっ！」

「なっ！？」

天魔の右腕を左手で掴み天魔の動きを止める。

俺も天魔も片腕は使えないがこれなら純粹な肉弾戦に持ち込める！

「死ぬ気で避けるよ、当たると痛いじゃ済まねえぞ？」

「…っ！」

右拳を顔へ突き出すが、顔を捻って避けられる。

反撃に蹴りを何度か繰り出す天魔、だが空中だから割と自由に避けられる。

身体を捻ったり、回るようにして避けたり、避けきれないものは受け流す。

身体を捻りながら避けこちらも蹴りや拳を突き出し、それも避けられる。

さらっと言っているがどちらもかなりのスピードだ。

その上これはただの打撃ではない、妖力を込めているので当たれば確実に骨は折れる。

おまけに空中で動き回っているから常人なら確実に平衡感覚が狂う。俺も目が回りかけていて気を抜いたら一気に天魔のペースに持っていかれるだろう。

すると天魔が接近戦を嫌がり、手に妖力を溜めて、妖力弾を散弾のように撃ち出してきた。

「さすがにこれはきついな…！」

思わず手を離して回避するが、その隙に距離をとられる。

「そちらの土俵で戦い続けるつもりは無いのでね…！」

さっきの散弾状の弾をいくつも繰り出してくる。

しかも俺の周りを高速で動き回りながら、時折拳や蹴りも交えてくる。

弾の密度かなり高く天魔の動きも速い。これを避けきるのは厳しいな。

「なら、避けない」

避けきれない弾は相殺すればいい。

尻尾に妖力を多めに込めて妖力弾を叩き落していく。

「…つくづく規格外だな、挟間殿は」

「…もう何とでも言え」

一発一発の威力は低いからこれなら俺じゃなくても出来るだろう…さて、それじゃ反撃しますか。

「三尾妖光線」

「ぬうつ！？」

街を守るときに使った技の三本バージョンだ。  
天魔の放った弾を飲み込みながら天満に向かって直進していく。  
何とか二本までは避けたが、三本目が右腕を掠った。  
それでもダメージは大きく、かなりの血が出ている。  
あの分だと少なくともこの戦いのうちは使い物にならないだろう。

「降参するかい？」

「いや、まだだ」

「引き際は肝心だぜ？」

「奥の手を残してあるのでな…！」

天魔がそう口にした瞬間、俺の周りに三つの竜巻が起こり俺に向かってくる。

「うおっ！？」

逃げ道が無くなる前に竜巻の包囲から脱出するが、そこに待ち構えていた天魔の蹴りをもろに食らい、追い討ちに放たれた妖力弾も何発か食らってしまった。

「いてて…、何だ今の竜巻…」

「悪いが種明かしは出来ない、このまま決めさせてもらうぞ！」

「そう簡単にやられるつもりは無いがな…！」

「いや、これで終わらせてやる、嵐風陣！」

今度は数え切れない竜巻が俺を包囲する。それだけではなく、竜巻から俺に向かって妖力のこもった鎌のような形をした風が飛んでくる。

天魔自身も妖力弾を放ち、見る見る内に俺の身体に切り傷が刻まれていく。

「…つく、そつ…！」

「とどめだ！風塵滅波！」

天魔の両手に込められた妖力が風と混じり、とんでもなくでかい風の塊となって、俺に向かって飛んでくる。

避ける事も叶わずにそのまま吹き飛ばされ、地面にクレーターを作ってしまった。

「…いってて…！」

かなり遠くまで吹き飛ばされてしまった。身体のダメージは大きく、あちこちが痛むが動けないほどではない。

「ここまでとは、正直予想以上だな…！」

やむを得ず尻尾を6本まで開放し、妖力を底上げして治癒能力を高める。

そのまま空を飛んで天魔の所へ戻ると、周りの天狗が啞然とした顔でこちらを見ていた。

「…気絶すらしていないとはな…！」



「いい攻撃だった。あと一步届かずだったかな」

「くっ、ならもう一度…！」

「遅いな、六尾妖光線！」

「っ！くっ…！」

三本でもぎりぎり避けられなかった天魔に倍の数の攻撃を避けきれぬ筈もなく、

一、二本目は避けたものの、残りの四本をもろに食らった。落ちていく天魔をお姫様抱っこの形で受け止める。

「完敗…だな…」

「！…こっちも驚きだ、意識があるのか」

「避けきれないと判断して三本目から回避より防御を優先したおかげだろう。」

もろに食らっていたら恐らく気絶では済んでいなかった」

「お前のその冷静さと判断力は強みの一つだな…」

「対一の戦いでここまで追い込まれたのは初めてだ」

「ならば全力を出した甲斐があったものだ…」

「…済まない、少し眠っても構わないか？」

「ああ、天狗達も認めてくれたみたいだしゆっくり休め」

周りの天狗は天魔が負けたにもかかわらず歓声を上げている。

「黒狼神様をあそこまで追い込むとは…」

「…これは、認識を改める必要があるそうだな…」

幹部の天狗達の呟いている声が聞こえた。

天魔にも聞こえたのか分からないが、気付くと既にすっすうと眠っている。

あれ、今なら女に見える気がする…

「ま、とりあえず部屋に運びますかね…」

俺も割りとボロボロなんだけどなあ…

と愚痴をこぼしつつ天魔を部屋へ運んだ。

く第十八話く 天の狗の頂点 対 黒き狼の神（後書き）

戦闘描写は難しいね…

く第十九話く その神、風の如く（前書き）

今回ちと短め

第十九話 その神、風の如く

「……ん」

「よう、起きたか」

「…挟間殿。ここは…私の部屋か」

「ん、悪いが勝手に入らせてもらったぞ」

「ああ、もちろん構わないさ。それより済まなかった。挟間殿も消耗していたのに、私だけ休んでしまつて…」

「気にすんな、怪我ならもう治つたし」

「それはそれで傷つくのだが…まあいい。他の天狗達はどうしている？」

「ああ、お前さんの看病をしようと部屋まで詰め掛けてきていたぞ。あんな大人数入るわけが無いからついさっき追い返したがな」

「そうか…ところで、部屋の隅のそのやけにでかい袋は？」

「看病が出来ないならせめて薬をって言つてたぞ。天狗総出で薬草やら集めてきたらしい」

「…そうか」

そう呟いた天魔の顔はとても嬉しそうだ。

口角が上がり、僅かに目を細めて袋を見つめている。  
こうして見るとやっぱり女に見えるな…  
普段は男に見えるんだが…不思議だ。

「挟間殿？どうかしたか？」

こちらの視線に気付いたらしい天魔が声を掛けてきた。

「ああいや、なんでもない。

それより、薬草やらはそのまま使うより調査したほうが効果が高いんだ。

他の天狗に少し教えておいたから、あとで診てもらおうといい」

「挟間殿は薬の知識があるのか？」

「ああ、昔…ちよつとな…」

忘れたつもりでいたんだがやっぱり思い出すと少し辛い。  
特に永琳に裏切られたつてのは心のダメージがでかいなあ…  
本人の口からは何も聞いてないから…なんて思ってたけど、  
確かめる術もないし、思い出すと後ろ向きな考えになってしまう。  
ふと天魔を見ると申し訳なさそうな顔をしてこちらを見ていた。

「すまない、触れないほうが良かったか」

「ん…いや、構わないさ。悪いな、気を遣わせて」

「そうか…」

「なあ、それよりあの竜巻はなんだったんだ？」

「む……まあ、戦いは終わったのだからいいか…  
あれは私の能力、『空気を操る程度の能力』によるものだ」

「空気が…なるほど、それで風を生み出して竜巻を作り出したって  
ことか」

「そういうことだ。妖力も込めてあるからただの竜巻ではないのだ  
が…」

「挟間殿には耐えられてしまったな」

「まああれぐらいなら耐えられるな。けど、俺以外だったら確実に  
仕留めてただろう」

「ふむ…そう言ってもらえるのは嬉しいが、やはり素直には喜べな  
いな」

「ははは…そりゃそうか」

「ところで狭間殿、これからどうするのだ？」

「んー、とりあえず問題は解決したし…また旅に出るかな」

「む、そうか…」

「そんな顔すんなよ、別に永遠の別れって訳じゃないんだしさ」

「ぬ、顔に出ていたか…？」

「どうも挟間殿と話していると調子が狂うな…」

「まあでも、その方がいいんじゃないか？ずっと無表情つてのも寂しいしさ」

「そうか…不気味と思われるのも心外だな。前向きに考えるとしよう」

「ああ、その方がいい。さて、それじゃ俺はそろそろ行くよ」

「随分急いでいるな？」

「他の天狗が戻ってきたらまたうるさくなりそうだし…早い目に退散するよ」

「そうか…挟間殿」

「ん？」

「天魔は役職の名…私の本当の名は…雪花だ」

「そうか…また会いにくるよ、雪花」

そう告げて天魔…いや、雪花の部屋を出て飛び立った。

天狗が俺を見て声を上げていたが無視して飛んでいく。

もう回復したようだし、後のことは雪花に任せて大丈夫だろう。

さて、次はどこに行こうか…



〈第十九話〉 その神、風の如く（後書き）

いきなり来て引っ掻き回してどっか行っちゃっ挟間さん

〜第二十話〜 かぐや姫（前書き）

キングクリームゾン！

第二十話　かぐや姫

さて、雪花の所を旅立ってから数百年の月日が過ぎた。

この数百年の間、色んな妖怪や人の里を訪ねた。

前の世界でもよく耳にした河童や鎌鼬、轆轤首に猫又なんて言う妖怪にも出会った。

中々面白い奴が多くてつい長話をしてしまったり、

人間に関わるのはやめるとか言われて、口論になったり、

時には喧嘩や殺し合いになる事もあった。

逆に人間の里に行ったときは、

自分が妖怪兼神である事を隠すのに必死だった。

尻尾と耳は当然隠す。が人間の耳がついていないので、

それを見られないようにするのが大変だった。

風が吹けば髪は流れてしまう。風の強い日は不安なので、

人々に幻術をかけて無いはずの耳をあるように見せたりしていた。

あと、妖怪が人間を襲っているのを見るとつい人間の味方をしてしまう。

今、自分は妖怪だと分かっているのだが、やはり見過ごす事ができないのだ。

そのせいなのか、たまに陰陽師と呼ばれる。

見た目が黒尽くしだった俺は、黒の陰陽師とか言われてるらしい。

一応、人間のフリをしているから霊力で戦ってたんだけどそのせいだろうか。

まあ別に構わないんだけど、呼び名が増えたなあ…

念のため人として行動するときには狭間と名乗るのは避けている。

黒狼神の時も狭間って名乗ってたから、そのままだとまずいと思っ  
て、

東雲　蜻蛉　（しののめ　かげろう）って名乗ってる。

狭間やら、東雲やら、黒狼神やら、黒の陰陽師やら…正直ややこし

い。

色々あったのだが、特筆する事はそのくらいか。

それより、人の里で面白い話を聞いた。

なんでも都にとんでもない美人がいるとの噂だ。

それだけなら大して興味も無いのだがその姫の名前がなんと、かぐや姫、らしい。

… かぐや姫って、あれ？竹取物語の？

随分懐かしいな、冒頭文の暗記をしていたのが懐かしい。

確か最後には月の迎えと一緒に月に帰るんだったか？

… ひよつとして月の迎えって、永琳達の事なんだろうか？

もし会えるのなら会いたいが、少し怖いという気持ちもある。

拒絶されるだろうか？永琳は味方をしてくれるだろうか？

まあでも、月の使者が永琳達じゃない可能性もあるし、

何よりかぐや姫は一目見てみたいし、一度都に行ってみるか。

妖怪の身体のスベックフル活用、全速力で都に向かう。

… 途中、道に迷ったのは内緒だ。

さて、都に着いたのだが…

最初の感想が…汚い！なんだこりゃ！

でかい通りなんかは掃除されてるんだけど…

細かい通りに入ったとたん、思わず目を背けなくなる。

ごみの山ならまだましだ。時折猫や人の死体が混ざっていたりする。

その上とんでもなく臭い。腐敗臭ってこういう臭いなんだろうか。

思わず能力で俺の周りの臭いを消した。あれは耐え難い…

気を取り直してかぐや姫を探そう。

人に聞くのが一番手っ取り早いだろうと思ひ、都の人々に聞くと、

思った通りあっさり見つかった。

聞く話によると都から少し離れた場所の屋敷に住んでいるのだとか。

そして居場所を尋ねるたびに言われた事が、

「あんたもかぐや姫に求婚に行くのかい？」

この言葉だった。

「いや、求婚に行くわけじゃない。一目見てみたいだけだ」

「そうかい、その方がいい。今、五人の貴族様がかぐや姫の心を射止めようと、必死になっているからねえ、そこに横槍入れようもんならどうなる事か」

「五人の貴族？」

「知らないのかい！？」

石作皇子様、車持皇子様、阿部御主人様、大伴御行様、石上麻呂様  
この五人の貴族様の事さ」

ああ、そういえばかぐや姫からとんでもない難題を出されるんだっ  
たか。

この世に存在しないものばかりを要求されて何とか偽物を用意す  
るけど、

結局全部バレるんだよな。

「なるほど、まあ求婚する気は無いから別にいいさ」

「そうかい、変わった奴だねえ…」

まあ、貴族様の怒りに触れないように気をつけな」

「ああ、ありがとう」

さて、屋敷の場所は分かったし行ってみるか。  
屋敷は歩いて五分くらいの所にあった。

例の貴族に見つかったら面倒な事になりそうだし、一応身を隠して向かっている。

身を隠しやすいように夜になってから来たため周りは真っ暗だ。

ほんの少量の光を生み出して視界を確保する。

屋敷というだけあって中々でかい家だ。

さてさて件の姫様はどこかな…

居た。縁側で月を見ながらため息を吐いている。

…なるほど、こりゃ美人だ。貴族達が必死になるのも頷ける。

しかしずっと月を見てるな…やっぱり月に帰ることを考えてるのか。

「…その妖怪、出てきなさい」

……………  
…？

「聞こえているでしょう？出てこないのなら人を呼ぶわよ」

いつの間にか月から視線を外したかぐや姫がこちらを睨みつけている。

完全にばれてるな、その上妖怪だって事もばれてる…

目が本気だしこりゃ出て行かなきゃ本当に人を呼ばれるな…

仕方ないか。

「夜分遅くに失礼、かぐや姫」

「…妖怪が私に何の用？」

「噂を聞いてね、大層美人な姫がいると聞いて一目見に来たんだよ」

「本当にそれだけ？」

「ああ、邪魔ならもうお暇するよ」

「…嘘は言っていないみたいね、変な妖怪」

「よく言われるよ」

「そんな所に居られたら話しにくいわ。あがりなさいな」

「いいのか？」

「良くなかったら言わないわ」

「そか、そんじゃお言葉に甘えまして…」

「悪いけどお茶は用意できないの。この部屋は私しか居ないし、誰も入らないように言っているから大丈夫だけど、他の部屋は行けないわ」

「別に構わないさ、いきなり押しかけてお茶を出せなんて我儘は言わねえよ。」

それより、何で俺が妖怪だって分かったんだ？」

「…あなた自分で気付いてないの？隠そうとしてるのは分かるけど、妖力が漏れているのよ。他の人は気付かない程度の微量だけど」

「そうなのか、ちゃんと隠しているつもりなんだがなあ…」

「まあ気付いたのは私くらいだし良いんじゃない？」

ところで、貴方名前は？」

「俺か？俺は…東雲蜻蛉だ」

「東雲…？貴方ひょっとして黒の陰陽師？」

「ああ、名乗った記憶は無いがそう呼ばれているらしいな」

「…妖怪だったのね」

「ああ、俺は真正銘妖怪だ。…内緒にしててくれよ？」

「別に言いふらしたりしないわよ。それより…」

「かぐや？誰か居るのかい？」

「「！！」」

やべえっ！誰か来た！？

「おいかぐや！誰も来ないんじゃないのかよ!？」

「おじいさまだわ、貴方の声が聞こえちゃったのかしら…」

なんとかごまかしておくから今日の所は帰って頂戴。

明日の夜にでもまた来て」

「わかった、そんじゃ頼んだぞ。じゃあな！」

全速力でかぐやの屋敷から遠ざかる。

危ない危ない、妖怪だろうと人間だろうと、



夜中にかくや姫の屋敷に忍び込んだなんてばれたらどうなる事が…

「…っふう」

ここまで来れば大丈夫だろう。

それよりも…

「東雲つて名乗っちまったな…やっぱり俺…」

もしかぐや姫が永琳たちと関わりがあるなら、

自惚れかも知れないが狭間の名を出せば少しは反応するだろう。

だがそれが怖かった。永琳と関わりがあるのかどうか確かめるのが怖かったんだ。

もし月からの迎えが永琳だったら？まだあの時の様に俺を迎えてくれるのか？

それとも…

「想像以上に引きずっちまってるな俺…」

考えたところで仕方が無いしなるようになる。

気がついたらそう自分に言い聞かせていた。

く第二十話く かぐや姫（後書き）

何か最近あんまり楽観的でもないような気がしてきた…  
すみません、精進しますm(\_\_\_\_)m

く第二十一話く 藤原妹紅（前書き）

もこたんINしたお！

〜第二十一話〜 藤原妹紅

「よつ、夜分遅く失礼するよかぐや姫」

「あら、いらつしやい蜻蛉」

かぐや姫と会った日から数日が経った。

あの時かぐや姫の部屋に来たのはやはりかぐや姫のおじいさんだっ  
たらしい。

かぐや姫以外の声が聞こえたので誰か居るのか気になって来たらし  
いが、

周りに誰も居ない事を確かめると少し疑われたが納得してくれたら  
しい。

それ以来、おじいさんとおばあさんが眠った後の深夜に来るように  
している。

かぐや姫の屋敷に来てしている事といえばもっぱら雑談である。

かぐや姫曰く、気を遣わずに喋れる相手はおじいさんとおばあさん  
を除くと俺ぐらいだそうだ。

貴族相手に喋るのは気を遣うし、相手はほとんど自分に対しての口  
説き文句しか言わない。

正直相手にするのも面倒になっていたらしく、例の五人の貴族にも  
難題を既に出したらしい。

どれもこの世には存在しないような物だ、まず持ってこれないだろ  
う。

その点俺は各地を旅してきたため話題には事欠かない。自分で言う  
のもなんだが、

陰陽師としても働いているので妖怪についても依頼してくる人間に  
ついて詳しい。

貴族なんかと話しているより俺と話している方が余程楽しいのだそ

うだ。

ちなみにかぐや姫が俺のことを蜻蛉と呼んでいるのは苗字の東雲が  
言いにくいかららしい。

未だに俺の本名は明かしていない。

「相変わらず姫って付けるのね、呼び捨てで構わないのに」

「まあこれはこだわりみたいなものかな」

「堅苦しいのは苦手なもの…」

以前からかぐや姫はこう言っているのだが、  
気品というか上品さに溢れているかぐや姫を呼び捨てにする気にな  
れなかった。

「まあいいわ、それで今日は何の話をしてくれるの？」

「そうだな、この間散歩していたときに見つけた河童と人間の話を  
しようか…」

かぐや姫は熱心に俺の話を聞いてくれている。

余程貴族の話がつまらないのか、俺の話を気に入ってくれたのかは  
分からないが。

そして俺が話し終わると、かぐや姫が唐突に話を切り出した。

「そういえば、蜻蛉は私に求婚したりしないわよね」

「随分急だな…まああれだけ求婚されていれば自惚れとは言えない  
か」

「自分で言うのもなんだけど帝ですら私に求婚してきたんだもの。少しは自信があるのだけど蜻蛉は何の反応も示さないから」

「そうだな…確かにかぐや姫は美人だが好みじゃないからな」

「はつきり言うわね…惚れてほしいってわけじゃないけど、そこまではつきり言われると女として悔しいわね」

確かにかぐや姫は美人なんだが、何と云うか幼いというか、大人に見えないというか、純粹すぎるように見える気がするんだ。まあ俺からすれば大半の生物が年下なんだけどな。

「さて、もうかなり遅い時間だしそろそろお暇するかな」

「あら、もう?」

「って言っても結構な時間話していたぞ?」

「そう…残念だけど仕方ないわね、暇があればまた来て頂戴」

「ああ、そうするよ」

別れ際、かぐや姫はいつも悲しそうな表情で俺を見送ってくれている。

他の貴族に見られてもしたら後ろから刺されそうだな、この状況。そして都に戻り、朝まで眠って陰陽師としての仕事をしたりする。最近はおくや姫の所にほぼ毎日通っているの、都に住んでいる。と言っても都に家がある訳ではない。どこかに居を構えるつもりは無いからだ。

寝泊りは能力で自分しか入れない空間を作り出し、そこを家として

いる。

勿論その空間に何も無いわけじゃない。生活用品も能力で作りに出している。

だから直接俺の所に陰陽師の仕事の依頼が来る事は無い。

依頼は都をふらついている時に頼まれたり、

逆にこつちから依頼がないか聞いて回つたりしている。

そしていつもの様に都をふらついていると声をかけられた。

振り返ってみると、黒髪おかつぱ頭の美少女が立っていた。

「あの、貴方が黒の陰陽師、東雲蜻蛉様でしょうか？」

「ああ、その通りだが」

「貴方に依頼をしたいのです」

「どういった依頼で？」

「…ある人に、呪術や妖術が掛けられていないか診て欲しいのです」

「何か症状でも出たのか？」

「いえ、ただ…一人の女性に異常に執着していて、

呪術や妖術の類ではないかと思つて…」

「なるほど、わかつた。

ところであなたの名前とその診てほしい人の名前を教えてくださいませんか？」

「あつ…すみません、名乗っていませんでしたね。

私の名前は藤原妹紅、診てほしい人は藤原不比等様です」

「藤原…失礼、貴族の方でしたか」

「いえ、気にしないでください。それより引き受けてくださいますか？」

誰かに惚れさせる呪術なんてなかった気がするんだが…  
貴族の依頼となると、断ると面倒そうだし引き受けるか。

「分かりました。治療は専門ではないので治せるかはわかりませんが、  
最善を尽くしましょう」

「ありがとうございます！」

しかし、藤原不比等ってどっかで聞いたような…

って思い出した！確か車持皇子の事だ！以前かぐや姫から聞いたんだった。

って事は執着している相手ってかぐや姫の事だろうか？

まあ単に惚れているだけだと思うが一応依頼なので診に行く。

「こちらです」

案内された家は、いや屋敷はとんでもなくでかかった。

かぐや姫の屋敷も結構でかかったが、その比じゃない。

さすが貴族って事か…

「…東雲様？」

すこし呆けながら屋敷を眺めていると妹紅に声を掛けられた。



「失礼、あまりに素敵な屋敷だったので見惚れていました」

「ふふっ…そうでしたか、不比等様は中でお待ちですよ。部屋までご案内します」

そういえば、この子確か藤原妹紅って名乗ってたよな…  
同じ藤原姓って事は不比等と血縁関係なんだよな…？  
随分悩んでいるような落ち着いてるような感じの子だけど、  
どうみてもまだまだ子供だし、不比等の娘じゃないのか？  
なんで不比等様なんて他人行儀な呼び方してるんだらうか…

「こちらの部屋です」

「失礼します」

「おや、貴方が黒の陰陽師、東雲蜻蛉かね？」

「ええ、お初にお目にかかります、藤原不比等様」

「妹紅から話は聞いているよ。呪術など掛けられていないのに、  
どうも妹紅は不安らしくてね…」

妹紅の方をしてみるが、既にそこには妹紅の姿は無かった。

「あれ？妹紅様は…」

「…どうやら、この部屋に居るべきではないと思ったのだらう。  
気にする事はないのに…」

どうやら妹紅は不平等の妾の子らしく、世間からは望まれない子だと言われているらしい。

不平等は妾の子だろうと何だろうと自分の可愛い娘である事に変わりない、

そう思っているのだがどうやら妹紅は、自分が居ると不平等にまで悪い評価がつけられると思っているらしい。

不平等はその事について嘆いていた。

「おっと、失礼。つまらない話をしてしまったね」

「いえ、お気になさらないください」

「すまないね、それじゃあ診てもらえるかい」

「ええ、それでは失礼します」

不平等の身体をぐるっと見回し、直接頭に触れて、脳に妖力や魔力の反応があるか診てみるがまったく反応が無い。やはり呪術も妖術も掛けられていないようだ。

「…呪術も妖術も掛けられていませんね、まったくの健康体です」

「やはりか、妹紅は心配性だからね…」

「すまないが東雲殿、妹紅にここに来るように伝えてもらえないか」

「ええ、もちろん構いませんよ」

「すまないね、いい機会だし少しあの子と話そうと思ってね。」

「恥ずかしい話だが、かぐや姫に熱をあげすぎて構ってあげられなか

「たからね……」

「なるほど、それでは呼んでまいります」

「頼むよ」

とはいえ、どこに行ったのやら……

この広い屋敷の中を探すとすると中々骨が折れるな。

と思ったが、不比等が居た部屋の近くですぐに見つかった。遠目で見ても分かるくらいそわそわしている。

「妹紅様」

「あつ……東雲様！お父さ……いえ、不比等様は！？」

「呪術も妖術も掛けられていませんでしたよ」

「そう……でしたか」

ほっとしたような、落ち込んだような、そんな表情をする妹紅。

呪術も妖術も掛けられていなくてほっとした反面、かぐや姫への執着は治らなくて落ち込んだ……って所かな？

「それより妹紅様、不比等様が呼んでいましたよ」

「えっ……分かりました」

会ったばかりだけど不比等は娘想いみたいだし、

妹紅は言わずもがな父想いだし、これで妹紅も少しは明るくなるかな？

きつと親に甘えられなくて寂しかったんだろつ。

さて、どんな話をしているのか気になるが盗み聞きはするべきじゃないな。

今日のところは帰って休むとしますか…

〈第二十一話〉 藤原妹紅（後書き）

あ、ありのままに今起こった事を話すぜ…

気がついたら不平等の口調が

どっかのゲ 太そっくりの医者っぽい口調になっていた…

なにを（ry

く第二十二話く 妖怪の決意（前書き）

前回からちょっと間が空いてしまった。

すみません、お待たせしましたm（――）m

〜第二十二話〜 妖怪の決意

不比等の診察（？）の日から数日が経過した。

最近は特に大きな出来事も無く、平和そのものだった。

都の中をぶらついて陰陽師の仕事をしたり、

天気がいい日に散歩に行つて妖怪と雑談していたり、

かぐや姫の所にも何度か顔を出している。

が、最近のかぐや姫はなんというか、

憂いを帯びているというか、落ち込んでいるというか、

何かネガティブな雰囲気を纏っている。

それも月を眺めながら。

天気の悪い日は雲で隠れて月が見えないので、

部屋の中でため息を吐いている。

天気のいい日は必ず縁側で月を眺めて悲しげな顔をしている。

…そろそろか、かぐや姫が月に帰るのは。

永琳達から逃げるのもいい加減にしないと…

いつもの様に深夜にかぐや姫の屋敷に忍び込み、かぐや姫に声を掛ける。

「よっ、かぐや姫」

「あら、蜻蛉…」

相変わらず心ここにあらずというか、悲しげな表情をしている。

俺は予め用意しておいた言葉を掛ける。

「どうしたんだかぐや姫？最近元気が無いな」

「やっぱり分かるわよね…」

「ああ、もつと言えば月を見てため息を吐いている事が増えた」

「…そうね、自分でも分かっているわ…」

かぐや姫の表情が一層暗いものになる。

「私はね…本当はこの地上の人間じゃないの」

予想していた答えが返ってくる。

が、今はまだ知らないふりしておく。

「…地上の？どういうことだ」

「私はね、月から来た月の住人なのよ」

「月？…月って、あの空に浮かんでいるあの月か」

「ええ…信じられないかもしれないけどね」

「随分突拍子も無い話だな…」

「でしょうね…、そして一週間後に月からの迎えが来る事になったの」

「迎え？じゃあかぐや姫は月に帰るのか」

「ええ…」

「…の割には暗い顔をしているな、お前にとって月は故郷なんだろ



う？

帰りたくないのか？」

「帰りたいわけないわよ…月に帰っても何も無い、退屈な日々に戻るだけ」

「なのに月の住人はお前を連れて帰ろうとしている…か」

「まったくよ…私の意志なんてお構いなし。」

私を地上に落としておいて今更連れ戻すなんてね…」

「そもそも、なんでかぐや姫は地上に落とされたんだ？」

「…ねえ、私はいくつに見える？」

「へ？…15、6つとどこじゃないのか？」

「でしょうね、でも違うわ。本当はもう3000は超えてるのよ…」

「！…不老不死ってやつか…？」

「察しの通り、私は不老不死の薬…蓬莱の薬を飲んでしまった。」

そして死ねない身になったわ。蓬莱の薬を飲む事は月では大罪なの。だから私は罰として地上に落とされた…」

「その罰の期間が終わったから、地上に連れ戻される？」

「そうね、それに月の連中は私の身体を研究対象にするかもしれない。もしかしたら、退屈どころかまともな生活が送れるかどうか…」

「どうにか地上に残れないのか？」

「無理よ…月の技術は地上とは比べ物にならない。

想像できる？一瞬で数百、数千の人を焼き殺す光を放つ武器を。

そんなものが大量にあるのよ、地上の弓や槍なんかじゃ歯が立たないわ…」

それってひよつとしなくても、永琳が作った光線銃だよな…

やっぱり月の住人つてのは永琳達だったか…

俺の予想が合っていて嬉しいような怖いような…

なんにせよ、いい加減腹括らないとな。

「なら、俺が協力する」

「無茶よ、さっきの話を聞いたでしょう？」

月の技術力の前じゃ、陰陽師の力くらいじゃ…！」

「大丈夫だ、俺はそんな程度じゃ死なない」

「…どうしてそこまで言い切れるのよ」

「さあ、どうしてだろうな」

「……………」

「まあ、種明かしは迎えが来た当日にするぞ。

その迎えてるのはいつ来るんだ？」

「…教えなくても蜻蛉はほとんど毎晩ここへ来るものね…」

三日後のこの時間帯よ、お爺様達には明日伝えるつもり」

「そうか、三日後だな…わかった、任せとけ」

「…ふふっ」

「？ なんだよ」

「いえ、自信満々の蜻蛉を見ていたら本当になんとかしそつに見えてきて…」

「へへっ、期待してくれていいぜ？」

「ええ、期待しているわ、でも無茶はしないで頂戴。死んだりしたら許さないわよ？」

「おお、こわいこわい…、そんじゃま、死なない程度に頑張るとしますかね」

「…やっとまともな顔になったわね」

「へ？」

「貴方、いつも明るく振舞っているように見えてどこか不安そうな雰囲気があったのよ。」

まるで何かに怯えているような顔だった」

驚いた。確かにかぐや姫と話すたびに永琳達の事を思い出して、嫌な気分になつてはそれを振り払って…の繰り返しだった。顔に出さないようにしていたつもりだったんだが…

「…そんな顔してたか」

「ええ、今は明るくなってるけどね、何か吹っ切れたのかしら」

「…まあ、そんなとこだな」

「今は言いたくないでしょうからいいけど…いつか聞かせて頂戴」

「ああ、それじゃ今日はこれでお暇するよ」

「ええ、それじゃあね」

「またな」

別れ際のかぐや姫はいつもより少し明るい表情だった。

俺は…どうだったのだろうか？

当然、自分の表情など鏡でもない限り分からない。

でも、迷いは無くなった。

永琳達に会って、確かめたい。

俺は本当に妖怪というだけで拒絶されたのか？

怖くないと言えば嘘になるが、でももう逃げないと決めた。

俺は決意を胸に都へ戻った。

〜第二十二話〜 妖怪の決意（後書き）

もうじきクライマックス

〜第二十三話〜 再会（前書き）

数億年ぶりの…

〜第二十三話〜 再会

「さて…そろそろか」

かぐや姫から月へ帰る話を聞いた夜からちょうど今日で三日。ついに今夜月からの迎えが来る。

かぐや姫の屋敷の周りには陰陽師や帝直属の兵まで居る。皆、かぐや姫を月へ帰すまいと意気込んでいる。

俺は屋敷から少し離れた森の中から屋敷の様子を伺っている。

永琳の兵器を相手にすると、尻尾を開放しないと敵しいだろう俺が妖怪兼神だとばれると面倒だし、

恐らく陰陽師たちじゃ永琳作の兵器には敵わない。

隙をみて全員を気絶させて安全な空間を作り出してそこに避難させるつもりだ。

さて、夜も更けてきたし恐らくもうすぐ来ると思うが…

「お、おい！ありゃなんだ！？」

陰陽師の一人が叫ぶ。

よく見ると月から雲の形に似た船が見える。

宇宙船か？多分、あれも永琳が作ったんだろう。

永琳は何でもありだな…

少しずつかぐや姫の屋敷に近づいていき、中から人が出てきた。

暗さと距離のせいか顔がはっきりとは見えないが、5人居る事は確認できた。

たった5人って事はないだろうし、おそらく船の中にまだ居るだろう。

「このっ！」

突然、陰陽師の一人が霊力の弾を船に向かって撃った。それを合図に他の陰陽師も一斉に船に向かって攻撃する。だが船は集中砲火を浴びたにもかかわらず無傷でそこに佇んでいる。そして船から光が放たれた。あまりに強い光だったので思わず顔を背けてしまう。そして光が収まった頃には陰陽師も兵士も倒れ伏せていた。

「さあ、月へ帰りましょう姫様」

「…お断りよ」

「…やはりですか、どうしても我々とは来て頂けませんか？」

「絶対にごめんだわ…！あなた達と共に行くくらいなら、地獄にでも落ちたほうがましよ！」

「…仕方ありませんね、手荒な真似はしたくなかったのですが」

五人の中の一人がさっと手を上げる。

それを合図に残りの四人が一斉にかぐや姫に飛び掛る。

しかし、次の瞬間四人はかぐや姫を捕らえるどころか矢で射抜かれていた。

「なっ…!!？」

「あの矢は…！」

「姫様！こちらです！」



数億年ぶりに聞いた凜とした声。

寸分の狂いもなく標的を打ち抜く弓の腕。

長い銀髪に赤と青の特徴的な服装。

あの頃より少し大人に、そして美しくなった永琳が確かにそこに居た。

「永琳！」

「説明は後です、こちらへ！」

永琳がかぐや姫を連れて逃げようとする、が船の中から出てきた月の連中に囲まれてしまった。

「八意氏…まさか貴女が裏切るとは…」

「あなた達のやり方には付いていけないのよ、私はもうあんな思いをしたくはない…！」

「未だあの時の事を気にしておられるとは…」

奴は忌むべき妖怪だった、奴は私達を騙していたのですよ」

「違うわ！彼は、狭間は私達を騙してなどいなかった！

貴方達は彼の良心につけこみ、利用した！彼の思いを踏みにじった！

私は誓ったの、もう誰も救えないような弱者にはなりたくない。

たった一人の親友ですら救えないような弱い存在にはならないと！」

「……！」

夢なら覚めなくていい、どうかこのまま夢を見させてくれ。

永琳は俺を裏切った訳ではなかった。それどころか、

彼女は俺を親友と言ってくれた。

今まで疑ってばかりだった自分が恥ずかしく思う。

だが今は恥じている場合ではない。

親友と言ってくれた者が今、目の前で聞きに陥っているのだ。

自分を信じ続けてくれた人が確かにそこに居るのだ。

ならば俺もその想いに応えなければならぬ。

永琳が起こした混乱に乗じて、既に陰陽師たちの避難は済ませてある。

後は、目の前の親友と、姫様を救うだけだ。

「仕方ありませんな…この人数相手に逃げられるとお思いか」

「たえそうであつても、諦める事だけはしない」

「…構えろ」

全員の銃口が永琳とかぐや姫に向けられる。

俺はすぐさま武装した人形を作り出し、周りの兵を吹き飛ばす。

「なっ!?!」

「えっ!?!」

「よう、久しぶりだな永琳」

永琳に声を掛けながら二人に近づいていく。

「あ…ああ…」

信じられないといった表情の永琳。

俺は数億年前と変わらぬ調子で話しかける。

「何だよ、その幽霊でも見たような顔は」

「狭間…貴方、生きて…!？」

「おいおい、勝手に殺すな。俺はこの通りぴんぴんして…っど!」

話している途中で永琳が抱きついてきた。

表情は見えないが小刻みに震えている、恐らく泣いているんだろう。

「良かった…本当に良かった…」

「…心配掛けて悪かった」

「…蜻蛉、貴方って…」

状況を把握できていない様子のかぐや姫が話しかけてきた。

「ああ、東雲蜻蛉ってのは偽名だ。ついでに言えば俺は人間じゃない。  
い。」

俺は狭間妖人、長生きな妖怪だよ」

「狭間…!？その名前なら月に居た頃に何度も聞いたわ。

月への移住計画で身を呈して民を守った英雄だとか、  
妖怪である事を隠して街に侵入した裏切り者だとか…」

「裏切り者ってのはこいつらが勝手に言ってるだけだよ」

周りを見回すと、体制を立て直した兵士達が再び銃口をこちらに向

けていた。

「…まさか生きているとは思わなかったな」

「あの爆弾の贈り物は中々刺激的だったが…俺を殺すには足りなかつたな」

「いつまでその態度で居られるかな…！」

リーダー格の男が手を上げて合図を出す。

それと同時に周りの兵士が一齐にこちらに向かって発砲してきた。即座に結界を張り、全ての銃撃を防ぐ。

「…狭間」

「…ん？」

俯いていた永琳がこちらを真っ直ぐ見つめていた。やはり泣いていたのか、目が少し赤く腫れている。

「…貴方は…私を許してくれる？」

「許すも何も、永琳は俺を裏切ったわけじゃないんだろっ？」

「…ふふっ、そうね。私は貴方を裏切ったりしないわ」

「ああ、俺を裏切ったのは周りの奴らだろっ」

視界に写るのは俺の結界を破ろうと必死に攻撃してくる兵士達。

「ええ、でも狭間。このままじゃ姫様を逃がす事ができないわ。  
…お願い、力を貸して頂戴」

俺は永琳を真つ直ぐに見つめなおして、口を開いた。

「もちろんだ。永琳の頼みとあらば断るわけにはいかないな」

さて、数億年ぶりの護衛任務といきますか。

〜第二十三話〜 再会（後書き）

かぐや編は次でラストの予定

〜第二十四話〜 守れなかったもの（前書き）

かぐや編終わらなかった…

すみせん m ( | ) m



〜第二十四話〜 守れなかったもの

結界の外をざっと見回し、敵の数を改めて確認する。

飛び交う銃弾や光線で少し見えづらいが、20人弱ってとこか。さっきの反応を見る限り、

かぐや姫が月へ帰るのを反対するのは予想していたみたいだが、永琳が裏切るのは予想外だったところか。しかし…

「このぐらいの相手なら永琳一人でも余裕じゃないか？」

「あら、ひどいわね。か弱い女を一人で戦わせる気？」

「よく言っぜ、数億年前じゃ俺の護衛なんか要らなかつたくせに」

「冗談よ、でも月に行つてからは事務仕事ばかりだったし、戦闘の機会なんてほとんど無かつたから腕が落ちているのは本当よ？」

「なるほどね…」

「それに、狭間一人でも余裕なのは同じでしょ？」

「まあな」

さて、おしゃべりはこの辺にしてそろそろ行動開始しますか。結界の外に十体人形を作り出して戦わせる。

何人かは仕留めれたが、大半が反応して人形が迎撃される。

よく訓練された兵士だ、なかなかいい動きをする。

だが、今の人形は仕留めるのが目的じゃない。

人形に気をとられて銃撃が止まった隙に結界の外に出る。慌ててこちらに銃を向ける兵士だが、既に遅い。

兵士の一人を羽交い絞めにして銃を奪い、人質にする。

「さあ、大人しく武器を捨てて月に帰ってもらおうか。それともいつを殺すか？」

周りの兵士がこちらを睨みながら悔しそうな顔をする。だがさっきのリーダー格の男だけ涼しい顔をしている。そして部下に冷徹に命令を下した。

「構えろ」

「なっ…!?!」

「隊長!?!」

「聞こえなかったのか、構えろ、と言っただ」

「ひっ…」

兵士が全員こちらに銃口を向け、発砲してきた。

俺は羽交い絞めになっていた兵士を気絶させ、結界を張って攻撃を防ぐ。

「正気かてめえら…」

「ふん、役立たずに掛ける情けなど無い」

「ふざけるな！てめえは仲間の命を奪う権利なんざ持つちやいない。他人の命を軽々しく奪っていいほど偉い存在でもない…！」

「部下の命など軽いものだ、替えなどいくらかでもあるのだからな」

頭に血が上っていくような気がする。

腹の中で煮えたぎっているものが抑えられない。  
気がつけば耳と尻尾を全て開放していた。

「消えうせる！妖尾十光線！！」

兵士達は悲鳴をあげる暇も無く消え去った。

人質として捕まえた奴は殺していない。  
俺は結界を解除して二人のもとに歩いていく。

「狭間…少しやりすぎなんじゃ…」

「あんな屑どもにはこれぐらいが丁度いいんだよ」

「いや、周りの事よ…」

「…あ」

周りを見渡すと一面焼け野原だった。

かぐや姫の屋敷には当てていないから、屋敷は無事だが…

「…確かに、少しやりすぎたか」

「少しどころじゃないわよ…」

かぐや姫が呆れた様子で呟いた。

確かに怒りで我を忘れていた気がする。

ここまでやる事もなかったか…

「まあ、後で能力を使って直しておくよ。

それより、永琳達はこれからどう…」

「この…化け物…！」

言い切る前に、目の前の空間に穴が空いた。

そこから出てきたのは、俺が作った空間に避難させたはずの不等。その手には刀が握られていて、そのままこちらに向かって…

「ぐっ…!？」

「狭間…！」

刀で俺の腹を貫いた。

「東雲！いや、この妖怪め！人々を殺した化け物め！」

「な…に…!？違う、俺は…！」

「何が違う!? お前がやったのだろう！」

この凄惨な状況を見て言い逃れなど出来るものか…！」

「待ちなさい、不等！」

「かぐや姫!ですがこいつは…！」

「狭間…いえ、東雲は月の迎えを相手にしただけよ。陰陽師達や帝の兵には一切手を出していないわ」

「では、皆は一体どこに行ったと…!?」

「俺の能力で避難させてある…」

「そんな言葉が信用できると…!」

「いい加減にしなさい!!」

永琳が今まで見た事の無いような怒りの表情で怒鳴る。弓を構えて不比等に突きつけている。

「狭間は私の親友であり、私達二人を救ってくれた恩人なのよ。これ以上彼に手を出す事は許さないわ」

「くっ…」

「やめろ、永琳。この状況じゃ信じるほうが無理な話だ」

「だけど…!」

「不比等、説明するからせめて刀を抜いてもらえ…!」

視界に写ったのはこちらに銃を構えている月の兵士。

先程俺が人質に取った兵士だ。

もう目が覚めて…!

まずい、不比等に当たる!

「不平等！」

「!？」

刀が刺さったまま無理やり態勢を変える。

だが、兵士が撃った銃は光線銃だった。

俺の腹を貫いた光線は、そのまま不平等の心臓を貫いた。

「狭間！不平等！」

「この…！」

「がはあ…！」

兵士は永琳の矢に撃たれた、恐らく死んだだろう。  
それより…！

「しまった、不平等…、しっかりしろ！」

「ぐ…う…！」

「永琳！頼む、診てやってくれ！」

刀を抜いて不平等から少し離れ、永琳に場所を譲る。

永琳が傷を診るが…

「…だめね、出血も酷いし傷が大きすぎるわ。

月の施設があれば治せたかもしれないけれど…」

「そんな…！」

「う…ぐ…東雲殿…」

「喋るな不平等！どうにか、どうにかならないのか！」

「無駄だろう…、自分でも分かる。この傷ではもう助からない…」

「だからって…！」

「私はいい…それより、すまない東雲殿…」

私の誤解のせいで随分と深い傷を負わせてしまった…」

「これぐらい俺ならすぐに治る…！でも、お前は…！」

「…はは、なら良かった。本当にすまなかった、東雲殿…」

貴方は、かぐや姫を守ろうとしていたというのに…！」

「お前は…！こんな時まで人の事ばかり気にして…！」

「これが性分だからな…、かぐや姫はご無事か…？」

「…ええ、私はちゃんとここに居るわ」

「…良かった、ご無事で何よりです」

「…？、おい、不平等？不平等…！」

「…狭間、彼はもう…！」

「……………くそっ」

何が安全だ…自分の力を過信したせいで人一人守れてない…。まったく、愚かにも程がある…。

「狭間…」

心配そうな表情でこちらを見つめている二人。

「…大丈夫だ、俺はこの後片付けをする。二人はどうする？」

「…月の追っ手が来る可能性が高いから、  
姫を連れてどこか身を隠せる場所を探すつもりよ」

「そうか…ついていけないけど大丈夫か？」

「地上の妖怪相手なら、余程の事がない限り大丈夫よ」

「そうか…」

「…ねえ、狭間こそ大丈夫？」

「ああ、心配は要らない。すぐに元に戻るさ」

「…そう」

戻る、じゃないな。戻らないと。

二人に心配をかけ続けるわけにはいかないし、  
何より辛いのは俺じゃない、…妹紅だろう。

…どんな顔して伝えればいいんだよ…



〈第二十四話〉 守れなかったもの（後書き）

次こそかぐや編を終わらせる…つもり

すみません、サブタイトル書き忘れてました…

く第二十五話く 旅の続き(前書き)

ようやくとかぐや編もとい平安編が終了…  
今回かぐやはでません…

〈第二十五話〉 旅の続き

永琳とかぐや姫が去った後、俺は焼け野原を能力で元に戻し、空間に避難させていた陰陽師たちを外に出した。皆、外に出てくるとほぼ同時に目を覚ました。

「貴方は…黒の陰陽師様。かぐや姫は!？」

「…申し訳ありません、かぐや姫は既に月へと…」

本当は帰っていないが、隠しておいたほうがいいだろう。

探しにいかれても困る、あの二人にはなるべく目立たないようにして貰わないと、

月から追っ手が来る可能性も否定できないのだから。

「そう…ですか、貴方の力を持ってしてもとは…」

「あの光は一体なんだったのか…」

「帝に…なんと報告すればよいのか…」

「東雲殿…!そのお方は…!」

俺の傍の不平等の遺体に気付いた一人が声を上げる。

「…月の、兵士の攻撃で…」

「そんな…!不平等様!」

信じられない、いや、信じたくないのか、  
数人が既に絶命した不比等に駆け寄る。

ある者は涙を流し、ある者は怒りをあらわにし、ある者は自らの無力さを嘆いていた…

俺は、というと、放心状態と言ったところだろうか。

不比等を守れなかった事への悔しさ、自分の力を過信した愚かさへの怒り、

不比等、妹紅への謝罪の念、そんなものが頭の中をぐるぐると回っていた。

(なんでこう、上手く行かないんだろうな…)

数億年前も、永琳達人間と仲良く暮らしていたつもりだった。

だが、妖怪とばれただけで敵と見なされ、軽蔑された。

今回だってそうだ。不比等は俺を妖怪と知り、攻撃してきた。

周りの状況も原因だったのだろうが、決定的な決め手となったのは、やはり俺が妖怪である、という事実だろう。

妖怪として生まれてこないほうが良かったのか？

頭に浮かんだ瞬間、そんな事を考えても仕方が無いと一蹴した。

(いつその事神様として生きてみるか？)

そんな事まで考え出す始末。まずいな、本格的に疲れてる。

妹紅には明日伝える事にして、とりあえず今日はもう遅いし休もう…

翌朝、俺は妹紅と一緒に不比等の墓前で手を合わせていた。

妹紅は涙を見せず、ただただ寂しげな表情で墓を見つめていた。

昨夜の事を伝えた時も、守れなかったことを謝罪したが、

「東雲様は父を守ろうとしてくれたのですから…謝らないでください

い  
」

そう一言告げただけだった。

そんな妹紅の姿が痛々しく、とても見ていられなかった。

その次の日、妹紅が心配でもう一度不比等の屋敷に訪れると、  
なんだか皆慌しく、何かを探しているようだった。

「あの、どうかしましたか？」

「東雲様！実は…今朝から妹紅様の姿が見当たらないのです…」

「なっ!?!？」

まさか、自殺でもするんじゃないだろうな!?!?

不比等だけじゃなく妹紅まで死なせるわけには…!!

「俺も手伝います!！」

「ありがとうございます、屋敷の中は私達で探しますので、  
外をお願いできますか？私達は外にはあまり詳しくないので…」

「わかりました」

俺はすぐに屋敷を飛び出し、人々に聞き込みをする。

だが有力な情報は手に入らず、ただただ時間だけが過ぎていった。  
日が沈みかけた時、ある人が教えてくれた情報が、

「多分、そんな感じの子を見かけたよ」

「本当ですか!?!何処に向かったか分かりますか!?!？」

「たしか、あの山に向かうと聞いていたよ。  
妖怪も出るし、山道は厳しいから止めたんだけど…」

「ありがとうございます！」

俺は全力で山に向かって走り、山頂を目指して山を駆け登った。  
しかし山頂には誰も居なかった。

別のルートで登ったのかと、山の周りを何度も探してみるが、  
結局妹紅は見つからなかった。

気付けば夜になっており、周りが暗くなってきて搜索が困難になっ  
てきた。

手がかりも無くなってしまったので、仕方なく一度不比等の屋敷に  
戻る。

屋敷に戻ってくると、屋敷の人たちに見つかったかと聞かれたが、  
見つからなかった事を伝えると皆、落胆していた。

皆は俺のせいではないと言ってくれるが、本当にそうだろうか？

あの時、不測の事態を何も考えず、

ただ永琳達を守ることしか考えていなかった。

不比等がなぜ俺の作った空間から脱出できたのかは未だにわかって  
いない。

だが、俺がちゃんと空間を管理していたら？

人質を放置せずにいたら？

いや、それ以前に妖怪である事を隠し続けていたら？

(…また、妖怪の話か…)

いつもこうなってしまう。そんな自分に嫌悪感を覚える。  
考えたって仕方が無いのに。

今更、妖怪に生まれた事を悔やんだ所で何も変わらないのに。

「…あゝ、もう！」

ぐだぐだ悩むなんざ俺らしくない、悩んだところで仕方が無い！

（悩んでる暇なんか無いだろう、俺！）

そうだ、不平等が死んでしまった。原因は俺だけじゃないかもしれない。

けど俺も原因の一つなのは確かだ。

だが、それを今更悔やんだ所で仕方が無い。うじうじしても誰も喜ばない。

不平等が死んで、妹紅が悲しんで何処かへ行ってしまった。

ならどうする？簡単だ、探し出してやればいい。

（今まで不平等に甘えられなくて寂しい思いをしてたんだから）

俺は不平等にはなれない、俺じゃ妹紅を支えてやれないかもしれない。

けど何も出来ないわけじゃない。諦める理由にはならない。

妹紅を探そう、そう決めた俺は都を旅立つ決心をした。

長い時間をこの都で過ごしたんだ、そろそろ旅の続きをしよう。

妹紅も心配だが、永琳とかぐや姫も心配だ。

二人はちゃんと隠れられる場所を見つけたのだろうか。

「うっし、思い立ったら即行動！」

人の集落を探して情報を集めるか。

途中、妖怪に聞いて回るのもいいかもしれない。

こうして、再びあてのない旅に出る事になった。

〜第二十五話〜 旅の続き（後書き）

果たして楽観的といえるのかこの主人公…

ユニーク1万アクセス突破しました！

ありがとうございますm（――）m

記念に何か書こうと思いますが…

何書くかはまだ決まっています。

感想の方で序盤に登場した女神と妖精も出すとなお良い、  
と意見を頂きました。

もし他にご意見あれば是非お聞かせください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0947y/>

---

東方黒狼記

2011年12月27日00時50分発行